

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第128集

# 野沢館跡 VII

NOZAWAKANSEKI

長野県佐久市大字原・野沢  
野沢館跡 VII 発掘調査報告書

2005. 3

長野県佐久市  
長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第128集

# 野沢館跡 VII

NOZAWAKANSEKI  
長野県佐久市大字原・野沢  
野沢館跡 VII 発掘調査報告書

2005. 3

長野県佐久市  
長野県佐久市教育委員会



## 例 言

- 1 本書は、平成16年に調査した長野県佐久市大字原に所在する野沢館跡Ⅶの調査報告書である。  
遺跡名 野沢館跡Ⅶ  
所在地 長野県佐久市大字原481-25、480-5、485-3、466-4、459-2外  
佐久市大字野沢78-2、266-4、112-5、59-3、63-2、116-5、113-10外  
調査面積 3,600㎡（調査対象面積）  
開発主体者 長野県佐久市  
開発事業名 「まちづくり総合支援事業（野沢散策路）」  
調査期間 発掘調査 平成16年7月12日～7月30日  
平成16年8月17日～8月19日  
平成16年9月1日～9月22日  
整理調査 平成16年7月29日～平成17年2月28日
- 2 本調査は、佐久市の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 3 調査は、羽毛田卓也（平成16年度本調査）を担当者とし、地元の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。
- 4 本遺跡に関わるすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
- 5 本書の執筆・編集は、羽毛田卓也が担当した。

## 凡 例

- 1 遺跡の略称 NNZⅦ
- 2 遺構の略称 石組遺構 → S  
柱 穴 址 → P
- 3 遺構・遺物の縮尺は各図中にスケールを付したので参照されたい。
- 4 本文・表・図版等の番号（例12-3）は挿図番号（例第12図3番）と対応する。
- 5 ピット付近の-数値は、確認面から底部までの深度を表す。
- 6 遺物の番号は土製品・石製品・銭貨・金属製品等各々の通し番号である。
- 7 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺はその都度明記し、明記のないものは任意の縮尺である。
- 9 土層説明中の粒径名称は日本共通の「堆積物粒径分類」によった。

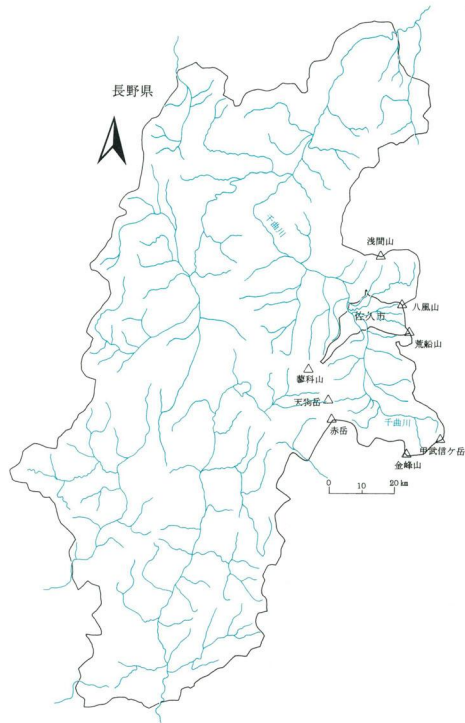
名称	礫・パミス				砂			泥	
	巨礫	大礫	中礫	細礫	粗砂	中砂	細砂	シルト	粘土
直径 (mm)	256 以上	256～64	64～4	4～2	2～0.5	0.5～ 0.25	0.25～ 62/1000	62/1000 ～4/1000	4/1000 以下

# 目次

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	7
3 調査の体制	9
4 調査日誌	9
第II章 遺跡の位置と環境	10
1 遺跡の自然的環境	10
2 遺跡の歴史的環境	11
第III章 調査の記録	16
第IV章 調査のまとめ	31
写真図版	39



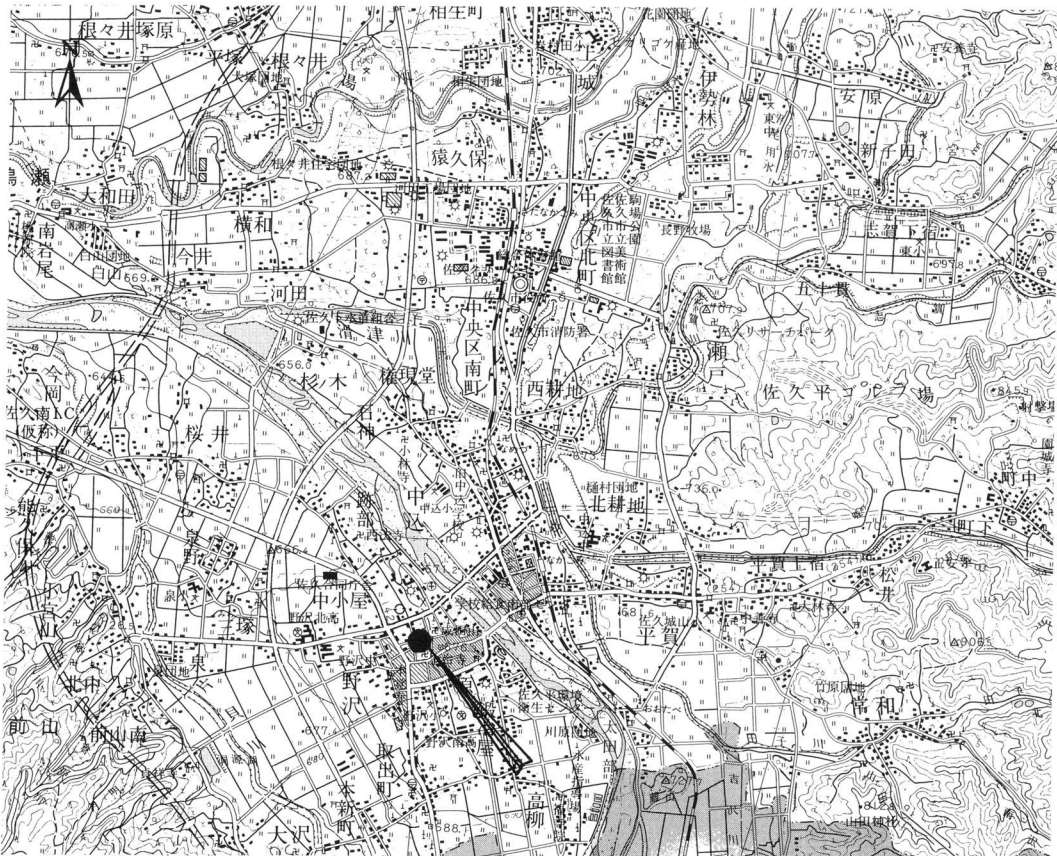
第1図 長野県佐久市位置図 (1:1,000,000)

# 第 I 章 発掘調査の経緯

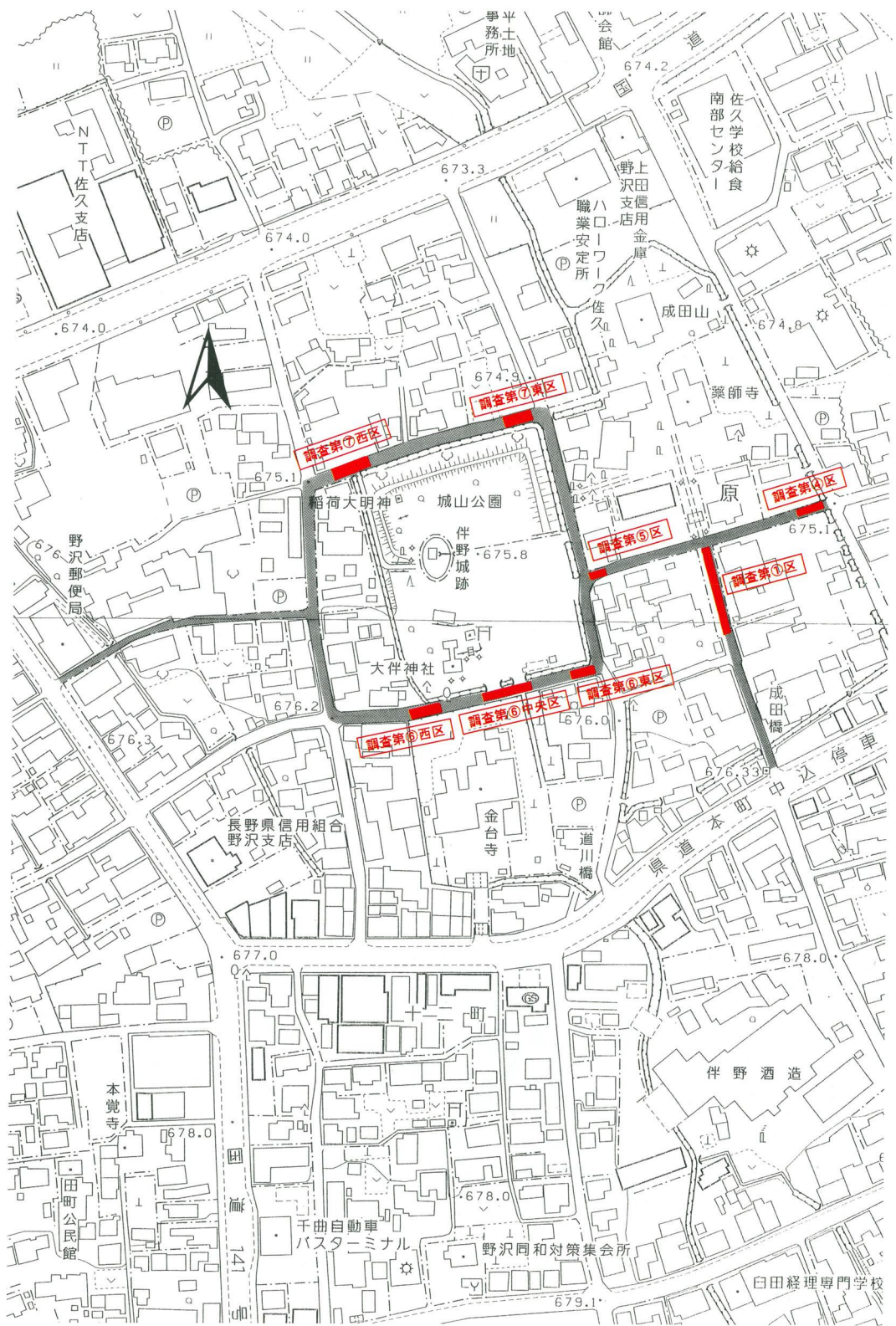
## 1 調査に至る動機

野沢館跡は、佐久市大字原・野沢に所在し、佐久地方南東部の甲武信ヶ岳に源を発し、佐久市中央を北進する一級河川「千曲川」によって成立した西側の低河岸段丘上（標高 6 8 2 m～6 8 6 m）に展開する平安時代末期から中世にかけての居館跡である。本館跡は平成 3 年、平成 1 1 年、平成 1 3 年、平成 1 4 年、平成 1 5 年に部分調査され、中世から近世にかけての遺構や遺物が検出された。今回調査した野沢館跡Ⅶは、本館跡中央部（主郭、県史跡伴野城跡）の周囲（外郭内）に位置する。

今回、佐久市建設部都市計画課が行う国庫補助街づくり総合支援事業「野沢散策路事業」に伴い、佐久市建設部都市計画課と佐久市教育委員会とで協議の結果、現在の地表面より 50～140cm を調査深度とし、破壊されないそれ以下については保存することとなり、都市計画課より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。



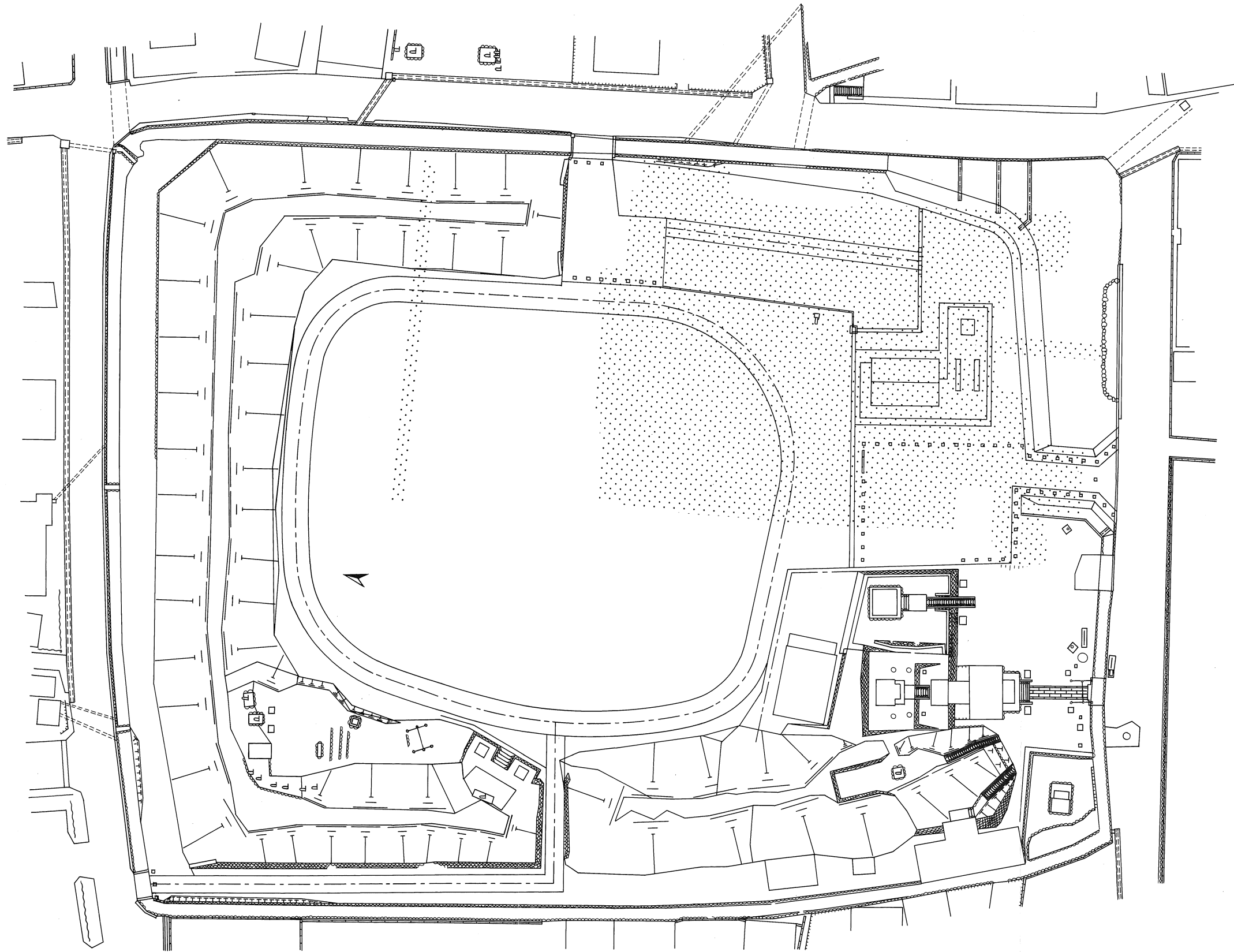
第 2 図 野沢館跡Ⅶ位置図 (1 : 50,000)



第3図 野沢館跡Ⅶ調査対象区域(網かけ)・調査区(赤色)位置図(1:2,500)







第5図 佐久市城山公園現況平面図（網点野沢館跡Ⅳ調査場所、1:500）



第6図 野沢館跡関連調査遺跡位置図 (1 : 5,000)

## 2 調査の概要

### 発掘調査

調査面積 1,982㎡

調査期間 平成16年7月12日から7月30日 (調査第①区)

平成16年8月17日 (調査第④区)

平成16年8月18・19日 (調査第⑤区)

平成16年9月1日から9月7日 (調査第⑥西区)

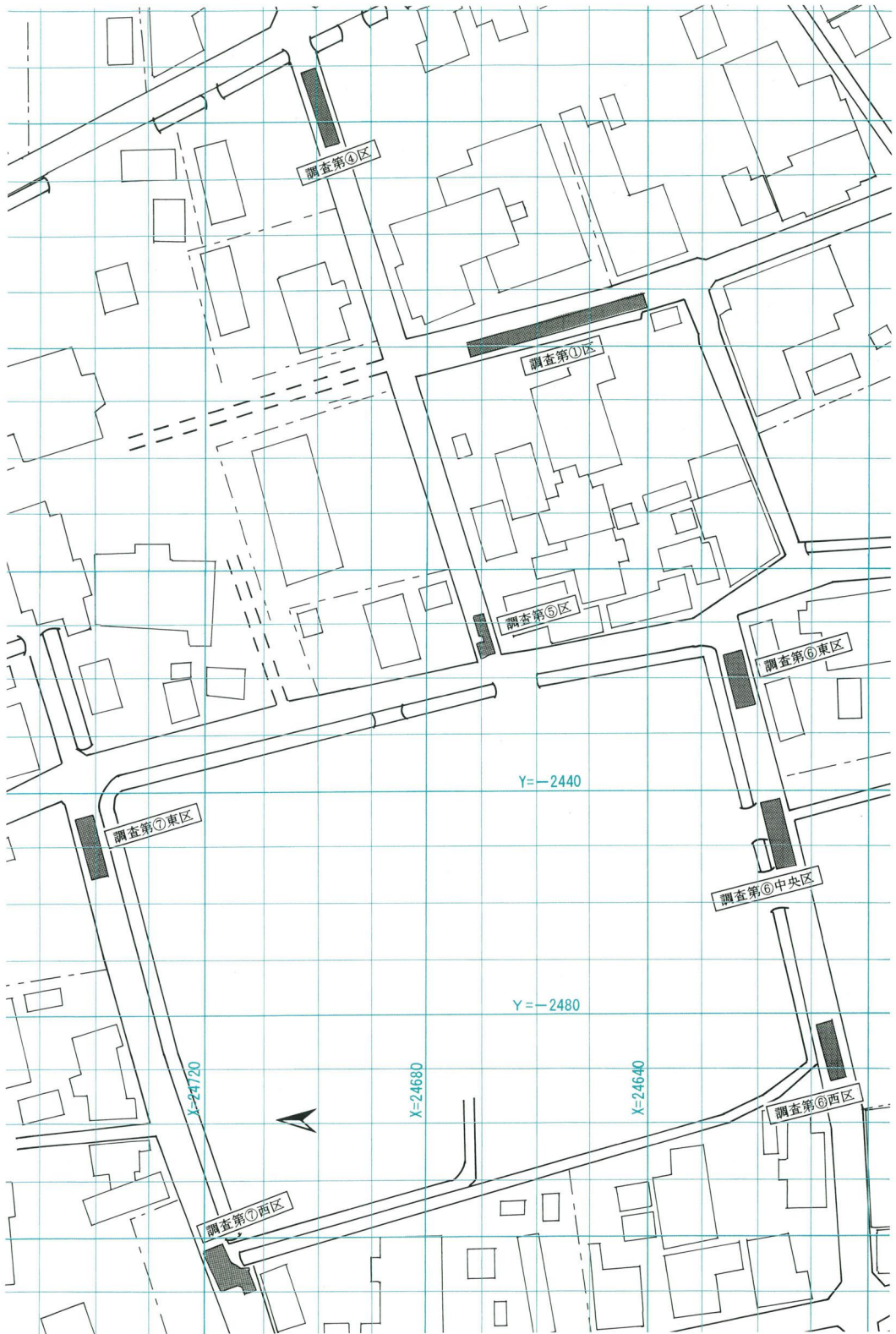
平成16年9月8日 (調査第⑥東区)

平成16年9月9日から9月14日 (調査第⑥中央区)

平成16年9月16・17日 (調査第⑦東区)

平成16年9月21・22日 (調査第⑦西区)





第7図 野沢館跡Ⅶ調査区位置図 (1:1,000)



## 整理調査

平成16年7月29日から平成17年2月28日（整理調査）

調査遺構	調査第①区	石組遺構	2基
		柱穴址	25基
	調査第⑥東区	近世から中世の堀址	1条
	調査第⑥中央区	近世から中世の堀址	1条
	調査第⑥西区	近世から中世の堀址	1条
		近代以前の水路址	1条
	調査第⑦東区	近世から中世の堀址	1条
	調査第⑦西区	近世から中世の堀址	1条
		近代以前の池・水田址	1基

## 3 調査の体制

事務局（平成16年度） 佐久市教育委員会文化財課

教育長	高柳勉
教育次長	赤羽根寿文
文化財課長	小林正衛
文化財係長	高村博文
文化財係	林幸彦、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、富沢一明 上原学、出澤力、赤羽根太郎
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子
調査員	阿部和人、菊池喜重、副島充子、花岡美津子、柳沢千賀子、山浦豊子

## 4 調査日誌

平成16年5月10日

都市計画課と保護協議

平成16年6月16日

地元説明会（調査日程・通行止め等）

平成16年6月25日

都市計画課と現地協議

平成16年7月12日～

重機による表土剥ぎ開始

平成16年7月12日から9月22日

重機による表土剥ぎ・表土運搬・表土埋め戻し  
測量基準杭の設置

遺構検出作業、遺構の掘り下げ、遺構の実測・写真撮影  
調査区の実測・写真撮影  
発掘調査機器材の搬出入

平成16年9月22日

全調査区の調査終了

平成16年7月29日～平成17年2月28日

遺物の洗浄・注記・復元・実測・写真撮影  
遺構実測図面の修正・遺構第2原図作成  
各種図面のトレス、報告書版下作成  
報告書編集作業、校正  
遺物・図面の整理・収納

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の自然的環境

佐久平は、北方に前掛山（2524m）・黒斑山（2404m）・高峰山（2106m）・湯ノ丸山（2101m）・火山活動中の浅間山（2568m）を主とする三国山脈の南端峰群、東から南方に関東山地から連なる山々である平尾山（1155m）・森泉山（1136m）・八風山（1315m）・寄石山（1334m）・物見山（1375m）・風の峰（1292m）・熊倉峰（1234m）・荒船山（1422m）・兜岩山（1368m）・霊仙峰（1268m）などからなる関東山地北西部の佐久山地北方峰群、西から南方に蓼科山（2530m）・双子山（2223m）・横岳（2480m）・茶臼山（2384m）を主とする北八ヶ岳連峰と、ほぼ四方を山々に囲まれた盆地で、長野県の中央東端に位置し、群馬県と接している。佐久平全域の平坦部の標高は約600mから1000mを測り、佐久市はこの佐久平のほぼ中央に位置し、周囲109.5km総面積192.62km<sup>2</sup>を測り、市内の平坦部の標高は620mから770mを測る。佐久市は北側で北佐久郡軽井沢町・御代田町、小諸市と、西側で北佐久郡浅科村・望月町と、南側で茅野市、南佐久郡臼田町・佐久町と、東側で群馬県甘楽郡下仁田町・南牧村と接している。平成14年度の年平均気温は10.9℃、年間降水量は994mm、年間日照時間は2069.9時間、最高最低気温差は46.4℃で、典型的な中央高地型気候となっている。

佐久市は中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川（佐久市内長9km）が北進し、浅間山麓に源を発する湯川（市内長9km）・濁り川、佐久山地に源を発する霞川・香坂川（8.6km）・志賀川（12.9km）・滑津川（24.1km）・田子川・瀬早川・八重久保川、北八ヶ岳山麓に源を発する石突川・片貝川（6.4km）・大沢川・中沢川・小宮山川・倉沢川・宮川などの小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地や河岸段丘・侵食谷を形成している。北方佐久山地の八風山や寄石山・物見山・兜岩山・熊倉峰・荒船山は、石英安山岩類や溶結凝灰岩類・ガラス質で黒色緻密な荒船安山岩類・輝石安山岩類により形成されている。これらの山の基盤には第三紀層・中生代層や一部古生代層が広がっているとされている。海生生物化石を産出することで知られる内山の初谷層（白亜紀）は中生代層で、内山層（漸新世末～中新世初頭）は第三紀層である。また志賀の兜岩層（淡水湖底堆積層）・駒込層（グリーンタフ）・八重久保層（砂礫凝灰岩）は第三紀層群であり、化石を産出することで知られている。

佐久平は第三紀後半に火山活動を開始した黒斑山（旧浅間山）の噴出物と平尾火山群噴出物および佐久山

系の溶結凝灰岩類の噴出により佐久平は陥没し始め、連動ブロック運動により御牧ヶ原台地が隆起をし始め、現在の佐久盆地の基礎が出来上がったとされている。よって佐久平の基盤には中生代・古生代層が広がっていると考えられている。平尾山はこの時の噴火を最後に活動停止した死火山である。

浅間山は今から1万4千年～1万1千年前にかけて2回にわたる大規模な噴火をし、軽石流（火砕熱泥流）を発生させている。佐久平の北側は、この浅間山第1軽石流の火山噴出物によって厚く覆われ、雄大な山麓を形成している。この軽石流の下には、約2万3千年前に水蒸気爆発を起こした黒斑山（当時の標高は2800mと推定されている）より流下した塚原泥流（火砕粉体流）が厚く堆積している。この塚原泥流による残丘は「流れ山」と呼ばれ岩村田地籍から中佐都地籍に点在する。岩村田北西部の「流れ山」は開発等により激減したが、中佐都から小諸市南部では、数多くの「流れ山」を見ることができる。「流れ山」の中には、古墳時代後期にその山頂や斜面を利用して古墳が築造されているものも多い。浅間軽石流は末端の湯川・滑津川地域でも20m以上の厚みで堆積しており、残丘本体はかなり巨大であることが窺われ、山体の上部を失った黒斑山の爆発の凄さをこの残丘により確認することができる。浅間山麓は火山噴出物の堆積という性格上水の各種作用を受けやすく、大小様々な峡谷や「田切り地形」と呼ばれる帯状台地と帯状低地の交互地形が形成されている。今回調査した野沢館跡Ⅶは、千曲川によって形成された微高地上に展開している。

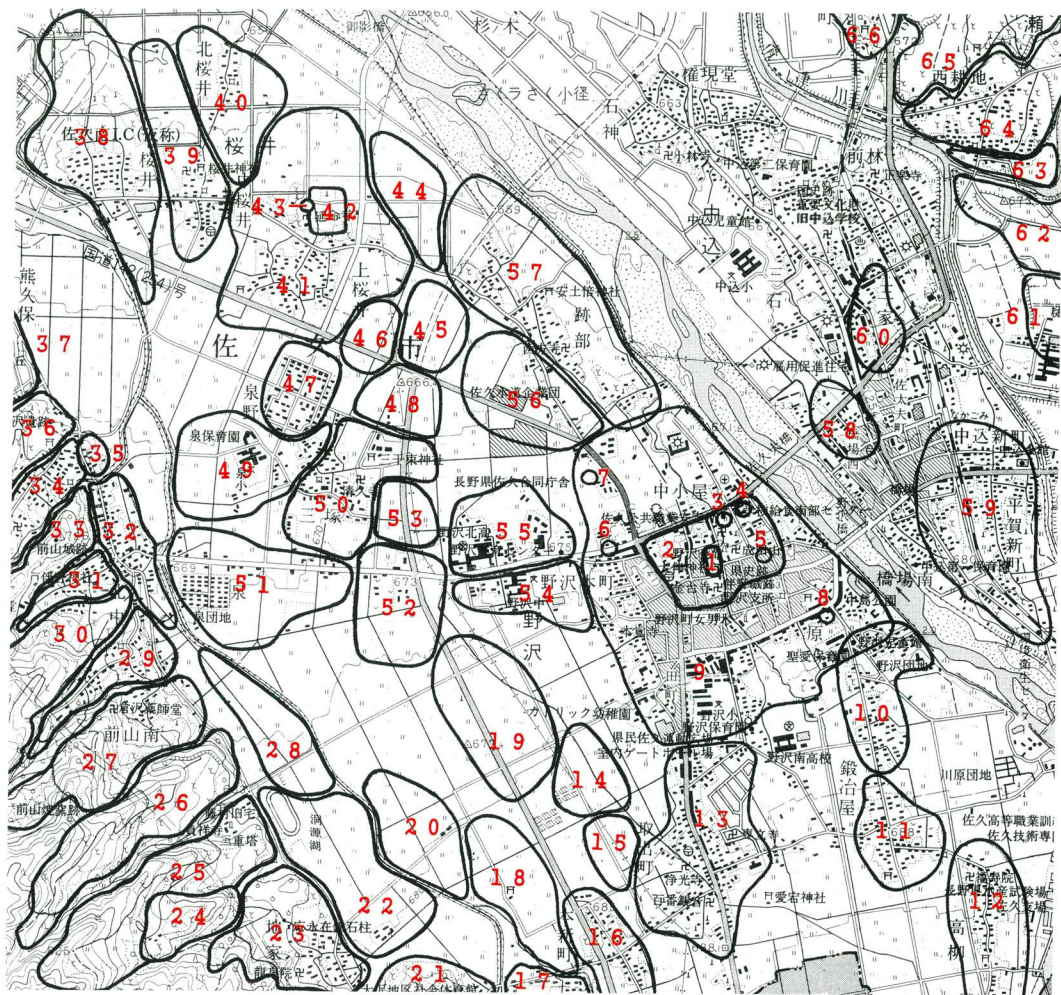
## 2 遺跡の歴史的環境

今回調査した野沢館跡Ⅶの所在する野沢周辺には、弥生時代から近世にかけての遺跡や遺跡群が、千曲川やその支流によって形成された帯状の微高地に展開している。また蓼科山麓末端の佐久平を臨む丘陵地にも遺跡が密集している。平成14年度より中部横断道の建設と関連道路の建設が始まり、それに伴う発掘調査が増加している地域でもある。

本館跡と関係の深い中世遺跡は前山城（第8図27番）と荒山城（8-21）・荒城（8-24）などがある。前山城は野沢館を野沢城として整備・改築したとされる小笠原（伴野）時長の子で跡部にいた伴野長朝が築城したとされているが、中世戦乱期とかなり時間差があり野沢城築城とあわせ疑問が残される。前山城は、他の佐久市内の中世山城同様に、15～16世紀頃戦時に備えた野沢城の出城として増改築したものと考えられる。

また荒山城と荒城は、伴野長朝の末裔である伴野貞祥・貞慶らが16世紀始め（永正年間）に、前山城の支城として築いたと考えられる。前山城を中心とした支城や砦はいくつかが周知されているが、山間部は詳細が調査されていないため、今後いくつか増加する可能性が高い。

他の周辺各遺跡および各時代等の詳細は第8図と第1表を参照されたい。



第8図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表 (遺跡番号は第8図と対応する)

No.	遺跡名	時代	所在地	備考
1	野沢館跡Ⅶ	中世・近世	原・野沢	今回調査
2	野沢館跡	平安～近世	原・野沢	野沢館跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ (H3・13～15) 薬師寺遺跡 (H11)
3	八幡宮跡	中世	原	文献、石碑
4	薬師寺跡	中世	原	文献
5	西光寺跡	中世	原	文献、地名
6	大東寺跡	中世	野沢	文献、地名
7	薬師寺跡	平安～中世	野沢	文献
8	地藏院跡	中世	原	文献、地名
9	野沢城跡	中世	野沢・原・跡部他	
10	社宮司遺跡	弥生・奈良・平安	原	
11	向畑遺跡	平安	鍛冶屋	
12	前堀遺跡	古墳	高柳	
13	白拍子遺跡群	奈良・平安	取出	

14	伊勢道遺跡	奈良・平安	取出	
15	高畑遺跡	古墳	本新町	
16	西浦遺跡群	縄文・古墳～平安	本新町	
17	下町屋遺跡	平安・中世	大沢	
18	前田遺跡	古墳	大沢・本新町	
19	儘田遺跡	古墳～平安	野沢	
20	御岳遺跡	古墳	大沢	
21	城山遺跡 荒山城跡	縄文～中世 中世	大沢	
22	大堀遺跡	縄文・弥生	前山	
23	地家遺跡	縄文～中世	大沢	
24	荒城跡	中世	前山	
25	洞源遺跡	縄文・平安	前山	
26	尾垂遺跡	縄文～近世	前山	
27	倉沢遺跡	平安	前山	
28	大門下遺跡	弥生～平安	前山	
29	象ヶ岡遺跡	縄文・平安	前山	
30	滝の下遺跡	縄文	前山	滝の下遺跡 (H3)
31	居屋敷遺跡	平安	前山	
32	町の後遺跡	平安・中世	前山	
33	前山城跡	中世	小宮山	
34	西の張遺跡	縄文～古墳	小宮山	
35	小宮山砦跡	中世	前山	
36	上の山遺跡	縄文	小宮山	
37	後沢遺跡	縄文～平安	小宮山	後沢遺跡 (S51・52)
38	北畑遺跡群	弥生～平安	桜井	
39	宮浦遺跡群	古墳	桜井	
40	上北谷遺跡群	弥生～平安	桜井	
41	平馬塚遺跡群	縄文～平安	桜井	平馬塚遺跡 (H16)
42	泉屋敷跡	中世	桜井	
43	平馬塚古墳	古墳	桜井	
44	上桜井北遺跡	古墳～平安	桜井	上桜井北遺跡 (S52)
45	跡部町田遺跡	古墳	跡部	跡部町田遺跡 (S50)
46	三塚町田遺跡	古墳	三塚	三塚町田遺跡 (S49)
47	三塚鶴田遺跡	平安	三塚	三塚鶴田遺跡 (S50)
48	市道遺跡	古墳～中世	三塚	市道遺跡 (S49)、市道遺跡Ⅱ・Ⅲ (H10・16)
49	一町田遺跡	縄文～平安	三塚	泉小学校敷地遺跡 (S40)
50	三千束遺跡群	古墳～中世	三塚	寺添遺跡 (H6)、宮添遺跡 (H11)
51	中道遺跡	弥生～中世	前山	中道遺跡 (S46)、中道遺跡Ⅱ・Ⅲ (H9・11)
52	辻遺跡	平安	野沢	辻遺跡 (H16)
53	三塚三塚遺跡	平安	野沢	三塚三塚遺跡 (S49)
54	東五里田遺跡	弥生～中世	野沢	東五里田遺跡 (H14・15)
55	長明塚遺跡	古墳～平安	野沢	薊沢遺跡 (S62)
56	金山遺跡	古墳～平安	跡部	
57	跡部儘田遺跡	古墳～平安	跡部	跡部儘田遺跡 (H11)
58	越上遺跡	平安	中込	
59	新町遺跡	奈良・平安	中込	
60	鎮守宮遺跡	平安	中込	



61	樋村遺跡群	弥生～平安	平賀	樋村遺跡（S57・58、H12）
62	上の台遺跡	弥生	平賀	上の台遺跡（S57）
63	西屋敷添遺跡	平安	瀬戸	
64	東千石平遺跡群	古墳～中世	瀬戸	東千石平遺跡（H11）
65	深堀遺跡群	弥生～中世	瀬戸	深堀遺跡（S40）、深堀遺跡Ⅱ～Ⅵ（H10～15）
66	深堀城跡	中世	中込	

野沢館跡は佐久市大字野沢・原に所在する中世の居館址とされ、昭和40年4月30日に『伴野城跡』として長野県史跡として指定されている。この野沢館の変遷を追ってみたい。

木曾義仲（源義仲）が滅亡後、義仲の家臣団を形成していた信濃武士団を追討し服従させるために、源頼朝は有力御家人であった甲斐源氏の加賀美遠光（巻末系図参照）を1185年（文治元年）に信濃国司として、比企能員を信濃目代として任命した。さらに木曾義仲に従っていた滋野系の武士団が支配していた佐久には、加賀美遠光の子で甲斐の小笠原で勢力を張っていた小笠原長清を地頭職として任命した。その後伴野荘を中心とする地域を長清の子六郎時長が、大井荘を中心とする地域を七郎朝光が知行支配する。大井荘と伴野荘との中間東よりに平賀荘が存在する。平賀荘は平安時代末頃より平賀氏（巻末伴野氏系図参照）が支配しており、鎌倉時代も継続するが次第に大井氏の支配するところとなる。前述の小笠原時長・小笠原朝光は、その支配する知行地より伴野時長・大井朝光と名乗るようになった。平安時代末期、千曲川左岸の通称野沢平で活躍していた武士団には、滋野系野沢氏、滋野系小宮山氏、滋野系桜井氏、滋野系石突氏などがいた。いずれも滋野系の武士団で、私牧の経営を背景に勢力を持っていた。野沢館の前身は平安時代末期に野沢地区で活躍した野沢氏が居住した長方形館と考えられ、館の周囲に築地あるいは板塀を巡らし、さらに水路状の幅の狭い濠を巡らせていたと推測される。野沢館は野沢平に勢力を張っていた滋野系武士団の没落とともに野沢平に進出してきた小笠原長清・時長・時直父子孫により居館「野沢館」（第30・31図参照）として再整備されたものと考えられる。伴野時直の子長泰の時、霜月騒動（1285年）が起こり、伴野長泰と弟泰直・長子盛時と次男長直は殺され、伴野氏（巻末伴野氏系図参照）は衰退し、伴野荘は一部を除き北条一族の知行地となる。その後の建武年間（1334～7年）に伴野長泰の孫長房が伴野荘地頭職として再び登場し、伴野長信・貞棟と続き、その後100年間伴野氏の居館として再び繁栄する。このころに居館「野沢館」は城郭「野沢城」（第31図参照）として整備されたものと考えられる。主郭内に土塁が築かれ、水路は深く掘削され、幅を大きく広げて堀となり、外郭にも土塁が築かれ、堀を巡らせたと推測される。また、外郭の外側も水路を利用し、あるいは水路を整備し、町屋や職人町を整備して「野沢城」として完成させたと推測される。岩村田に所在する「大井城」も近年の調査に伴い、「田切」利用の堀や区画溝を何重にも持つ城として範囲を広げてきている。主郭をめぐるように配置された町屋は堀状の区画溝を持ち、戦時には城としての機能を持っていたと推測される。同様なことが野沢城でも確認されるものと考えられる。野沢城は1540年に武田信虎の佐久侵攻に伴い落城した。そして1583年依田信蕃の佐久侵攻に伴う戦いで落城し廃城となるまで、佐久侵攻武士団と佐久武士団との戦いの中で廃城と再建を繰り返したと考えられる。近世初頭には小諸に移封してきた仙石氏により官倉が建てられ、江戸中期には陣屋が建てられている。野沢城の主郭部分は、江戸時代以降は城としての機能は失ったものの、明治から今日まで公有地として機能してきたために、大幅な改変をされることなく今日に至るまでその姿をとどめている。現在は城山公園として平成15年度に慎重に再整備され、今までの樹木に覆われ見通しの効かない閉鎖的ないイメージが払拭され明るく広々とし、地元が開かれた史跡公園として多くの人に利用されている。

外郭内の北東部に位置する薬師寺について、野沢館にとって重要な意味を持つため、その変遷を追ってみたい。薬師寺は奈良時代より続く真言宗寺院が、平安時代末期の1150年（久安6年）に、現在の佐久漁協南側小字跡部前（第30図参照）の地に再建されたと伝わっている。佐久市内の真言宗の寺院が平安時代末に滋野系一族の活躍した地に次々と創建されていることから、時代的には大きな間違いはないと考えられる。そ

の後薬師寺の末寺とされる西光寺（西光寺として地名が残存）・大東寺（大道寺として地名が残存）・地藏院（地藏堂として地名が残存）・常福院・延命院・眞藏院が創建され、7堂伽藍を誇る規模の大きな寺院であったと伝わっている。この7堂が地名・地形などから鑑み、野沢館を取り巻くように配置されていたと推定されるため、平安時代末期の野沢氏の居館である「野沢館」が存在するのであれば、現在の主郭部分か、この付近にあったものと想定される。平安時代末期の薬師寺再建に関係したのは、滋野系野沢氏と考えられるが、7堂伽藍として再興したのは、時代背景や末寺6堂と主郭・外郭との位置関係などを鑑みると、当時伴野荘に地頭職として就いていた小笠原長清・伴野時長父子と考えられる。さらに1281年（弘安4年）佐久地方唯一の時宗寺院である金台寺（伴野道場）が、館の南方に創建された。現在の金台寺は江戸時代に南より移動してきたものである。また武蔵国聖天社の永禄6年（1563年）の金鼓（伴野信是寄進）に野沢郷薬師寺の銘があることや、永禄年間に伴野氏が館の鬼門守護の祈願を八幡宮と薬師寺に行わせていることより、永禄年間には薬師寺は前述の跡部前より鬼門方向へと移動していたことが推測される。薬師寺移動時に他の末寺がどの程度残存していたかは不明だが、地名として残された二寺一院は残存していた可能性がある。移動してきた薬師寺は、地形・伝承等より鑑みて、外郭の外側の現南部給食センター東側に建てられていたと推定される。八幡宮は廃社となるまで館の鬼門方向である外郭の外側の現ハローワーク付近に建てられていた。また八幡宮は残存する鰐口（伴野信是寄進）の銘に「永禄12年7月信州佐久郡野沢郷八幡宮」とあり当時の伴野氏及び野沢城の繁栄を物語っている。

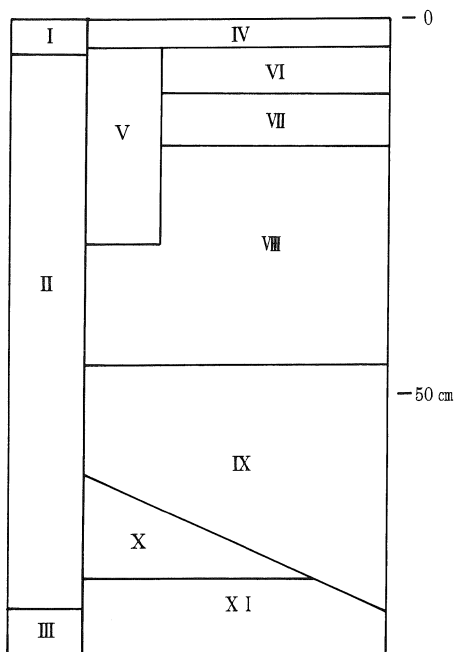
平成11年度の薬師寺遺跡（野沢城外郭北東部）の調査で、近世寺院基壇下部より中世の園池が検出されている。園池を埋め立てた河原礫に混じって宝篋印塔破片や五輪塔部材破片が出土している。また池法面からは15世紀後半以降の土鍋片・陶磁器片が出土し、池は15世紀以降の時期が推定される。続く平成13年度の野沢館跡Ⅲ（野沢城外郭東側中央部）の調査では、中世から近世の遺構や遺物が検出されている。一部13世紀代の遺物もあるが、中世の主体は16世紀と考えられる。また平成14年度の野沢館跡Ⅳ（野沢城主郭南東部）の調査では南側の堀の北ラインと土橋と考えられる遺構が検出された。さらに平成15年度の野沢館跡Ⅵ（野沢城外郭北西部）の調査では、外郭の堀の一部が検出された。

# 第Ⅲ章 調査の記録

## 1 調査の方法

調査対象地は、いずれの地点も現在使用している市道であり、迂回路のない生活道路である。必然的に細かく通行止めと迂回路を設定しつつの調査であり、通学路に指定されている箇所もあり、安全対策には十分な注意を払った。対象地には、すでに高深度の上下水道等の設備が敷設されており、遺構残存状況が良好な地点⑦区10地点を選んでの調査となった。散策路事業の深度は、調査第①・②・③区で最大45cm、調査第④・⑤区で最大60cm、軟弱地盤である調査第⑥・⑦区で最大85cmであり、遺構確認面までの深度によっては、破壊されず残される部分も考えられた。野沢館跡として重要な意味を持つ調査⑥・⑦地区は、遺構確認面までの深度によっては全面調査することとし、破壊が及ばない場合は部分調査とした。また調査①地区は付近の調査による深度と、遺構残存状況が良好と判断されたため全面調査とした。調査第②区と調査第③区は現地で詳細な調査を行った結果、ガス管（新旧の敷設換）と水道（新旧の敷設換）・下水道の敷設によりほとんどが破壊されていることが判明したため工事時の立会い調査とした。また調査第①区で検出されたS2号石組遺構は石組が調査区域外に伸びており、石組を外すことができなかった。協議の結果、道路端の工事であるため保存が可能となり、掘り出したシルト質土砂を充填し、土嚢袋で固定し、現状埋土保存とした。

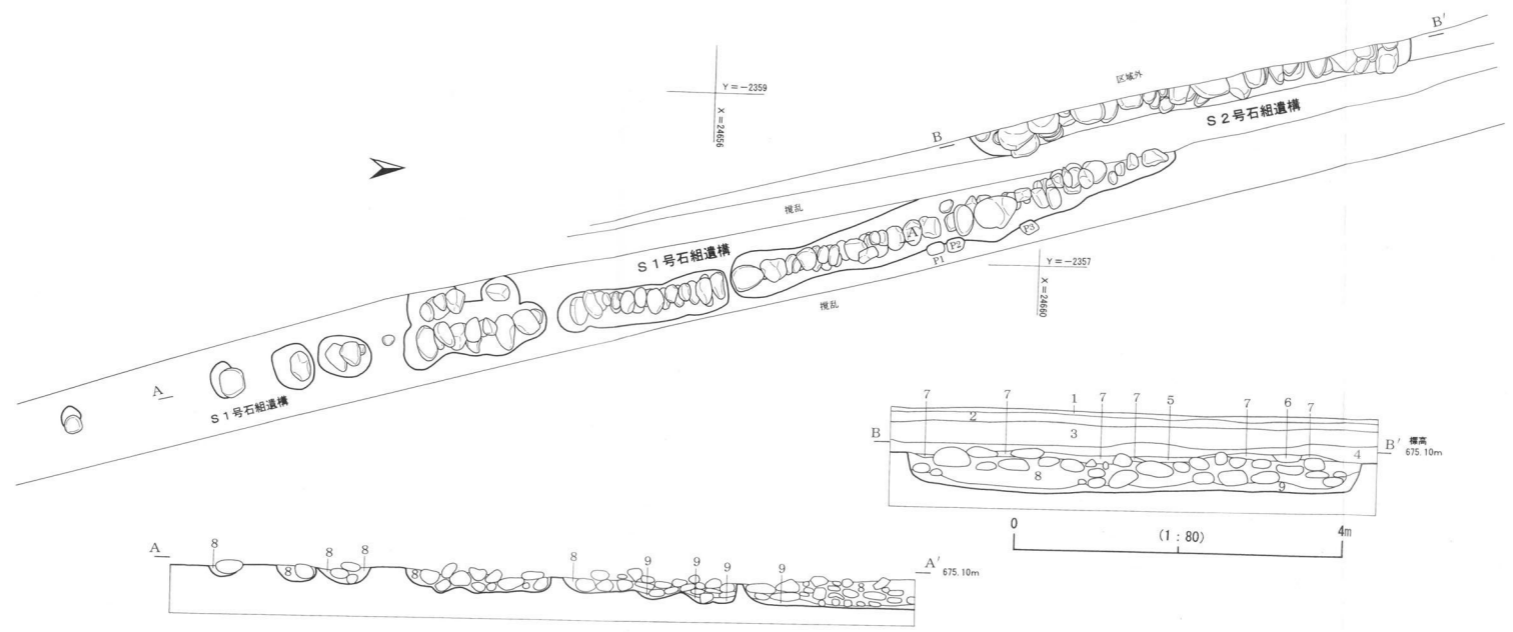
## 2 調査第①区



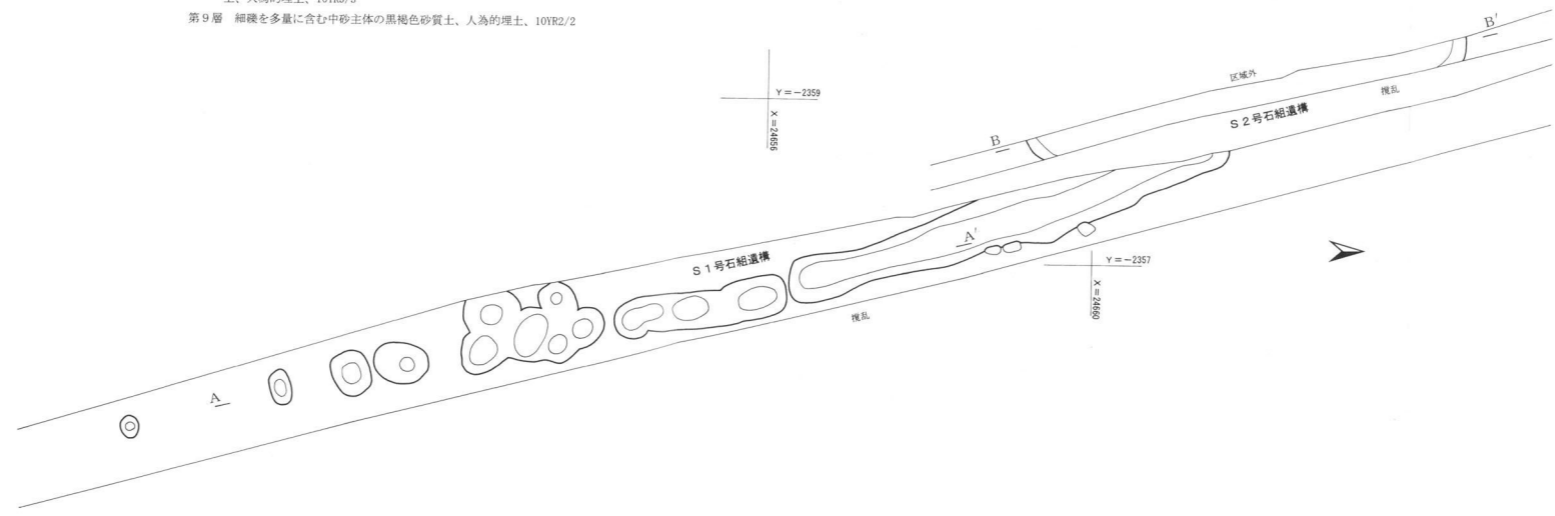
第9図 調査第①区層序模式図

調査第①区は、野沢館跡外郭内東部中央に位置する。検出された遺構は中世から近世と考えられる柱穴址25基と中世以降の石組遺構2基である。基本となる全体層序は、調査区南側で観察したが、場所により大きく異なっている。第Ⅰ図にも地表から確認面までの土層を載せてあるので参照していただきたい。遺構確認面までの深度は場所により異なり、調査区南側で50～60cm、調査区中央で42cm、調査区北側で48cmであった。全体層序第Ⅰ層はアスファルト層で下水道敷設工事に伴うものである。第Ⅱ層は碎石層、第Ⅲ層は攪乱埋土層で下水道敷設工事に伴うものである。第Ⅳ層はアスファルト層、第Ⅴ層は碎石層で、道路舗装工事に伴うものである。第Ⅵ層はアスファルト一部コンクリート層、第Ⅶ層は石炭燃焼屑を主体とする碎石層で、道路舗装工事に伴うものである。第Ⅷ層は暗褐色土層で崩壊壁土・近代陶磁器片を含む整地層である。第Ⅸ層は黒褐色土層で耕作と考えられる。第Ⅹ層は5～10cm径の河原礫を少量含む褐色砂層で、第Ⅺ層は5cm以下の河原石と砂質土を微量含む黒褐色シルト層である。遺構は第Ⅹ層中および第Ⅺ層中において確認した。平面的





- 第1層 アスファルト層
- 第2層 河原石を主体とする礫層
- 第3層 人為的な整地層、シルトと中砂を少量含む灰褐色土、10TR4/2
- 第4層 田耕作土と考えられ、シルトと炭化材微小片を微量含む黒褐色土、10YR3/2
- 第5層 田耕作土と考えられ、黒色粘土粒子を少量含む黒褐色土、10YR2/3
- 第6層 P 8号柱穴址の覆土で、中砂を多量に炭化材微小片を微量含む黒褐色土、10YR2/3
- 第7層 黒褐色中砂を少量、明黄褐色シルトと炭化材微小片を微量含む黒色土  
人為的埋土、10YR2/1
- 第8層 明黄褐色シルトブロックとシルト粒子を少量含む、細礫と炭化材微小片を微量含む暗褐色  
土、人為的埋土、10YR3/3
- 第9層 細礫を多量に含む中砂主体の黒褐色砂質土、人為的埋土、10YR2/2



第10図 S1号・S2号石組遺構実測図

には攪乱が著しく全体の68%が攪乱を受けていた。なお南側に集中する攪乱坑は近代以降のごみ穴である。

### (1) S1号・S2号石組遺構

S1号石組遺構は調査区中央で、S2号石組遺構は調査区中央西側で検出された。S1号石組遺構とS2号石組遺構との間にガス管敷設時の攪乱があるため、新旧関係は不明である。

S1号石組遺構は、検出長14.2m、検出最大幅0.91mを測り、主軸方位は北から西に約15度振れる。攪乱により断定はできないが、建物址の東辺と考えられる。また中央付近で西側に伸びると予想される石組列が存在されるため、その部分で本石組遺構を二つに分けることが可能である。その場合、南側の全長は4.9m、北側の全長は8.5mとなる。主軸方位は、南側で北から西へ13度振れ、北側で北から西へ16度振れる。

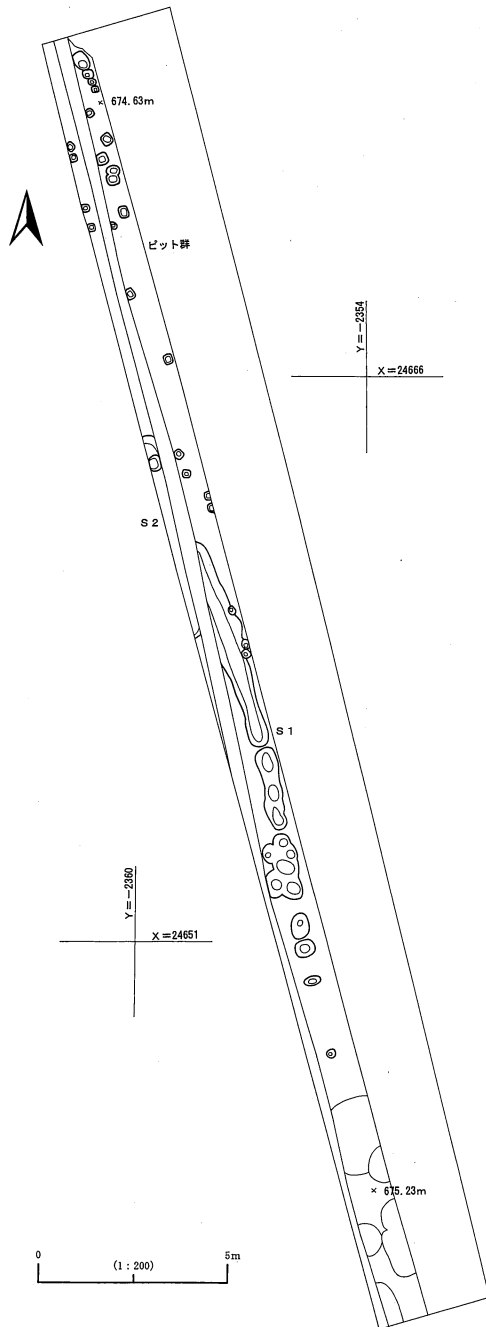
S2号石組遺構は、検出長5.5m、検出最大幅0.36mを測り、主軸方位は北から西に14度振れる。建物址の東辺と考えられる。

確認面までの土層は6層が確認された。第1層はアスファルトで、第2層は河原石を主体とする礫層である。第3層は人為的な整地層で、シルトと中砂を少量含む灰褐色土である。第4層は旧耕作土と考えられ、シルトと炭化材微小片を微量含む黒褐色土である。第5層は旧耕作土と考えられ、黒色粘土粒子を少量含む黒褐色土である。第6層はP8号柱穴址の覆土で、中砂を多量に炭化材微小変を微量含む黒褐色土である。第3層は近代以降の陶磁器片を含有し、第4・5層は近世の陶磁器片を含有する。

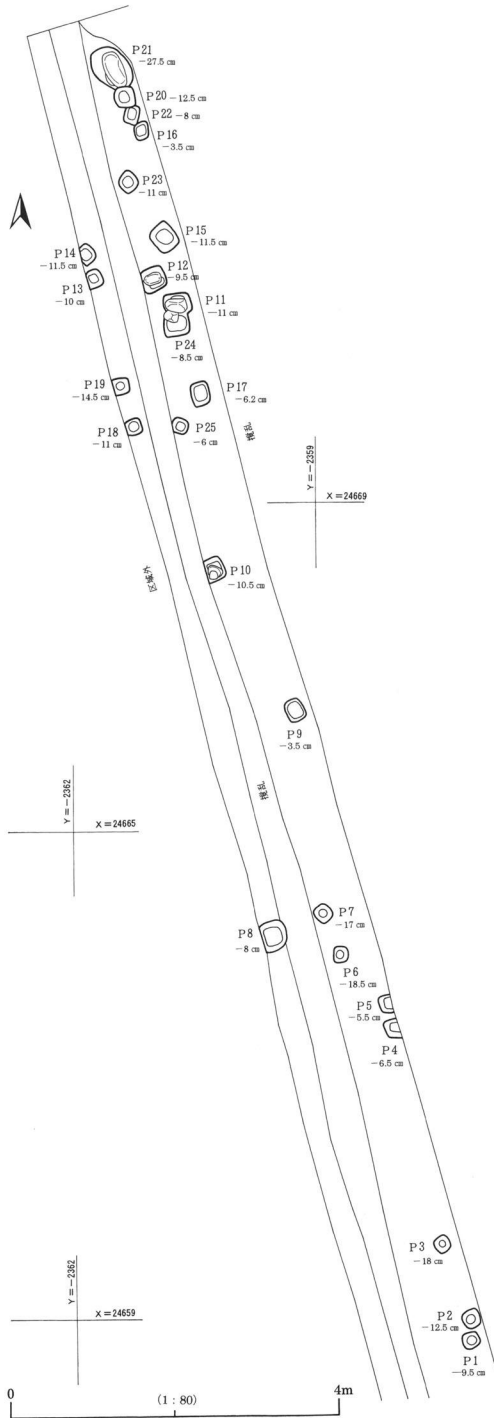
構築土は第7層、第8層と第9層の3層が確認された。第7層は、黒褐色中砂を少量、明黄褐色シルトと炭化材小片を微量含む黒色土で、粘性が強く固く締まっていた。第8層は、明黄褐色シルトブロックとシルト粒子を少量含み、細礫と炭化材小片を微量含む暗褐色土で、粘性が強く非常に

固く締まっていた。第9層は、細礫を多量に含む中砂主体の黒褐色砂質土である。3層ともに人為的に埋められたと考えられる。

石組は、上下方向で最大4個が重ねられ、ほぼ南北方向に直線をなす。石は千曲川の扁平な河原石を利用したと考えられ、輝石安山岩・角閃石安山岩などの安山岩類が主体を占め、わずかに花崗岩が見られる。側辺を打ち欠いて成形した石もわずかに見られるが、ほとんどがそのまま利用している。



第11図 調査第①区全体図 (1:200)



第12図 調査第①区 ピット群実測図

構築は、第9層を敷き詰めた後、石の扁平な面を水平になるように調整し、石を組みながら第8層を充填したものと考えられる。

遺物は、石組下部より丁寧に作られた瀬戸天目の破片2種2片、土鍋片、かわらけ片、構築土中より石播鉢破片2片が出土した。また7層上面の石組遺構検出面からは、土鍋片、かわらけ片、近世の瀬戸灰釉碗破片が出土している。

所属時期は、近世陶磁器片が出土する第4層・第6層下面より検出されたことや、出土遺物の帰属年代を鑑み、15世紀～16世紀以降と考えられる。

## (2) ピット (柱穴址) 群

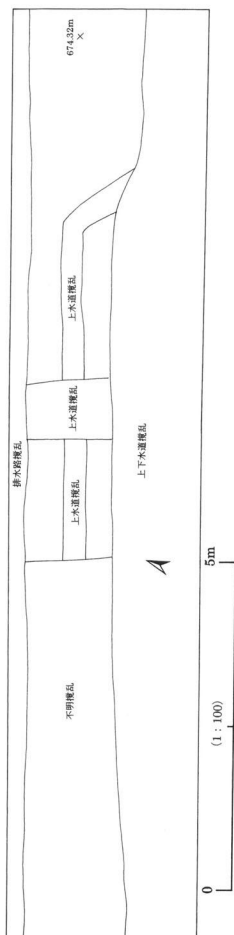
ピット群は調査区北側半分を中心に検出された。いずれも楕円形 (P21号のみ) ないしは隅の丸い方形を呈していた。

ピットは総数25基を検出したが、柱列として組むことはできなかった。

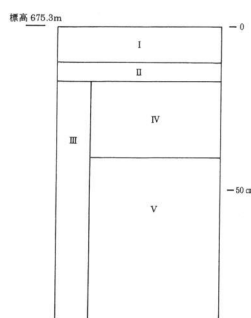
観察された覆土は以下のとおりである。P1号・P2号・P3号・P4号・P5号柱穴址の覆土は粗砂とシルトを少量、炭化材微小片を微量含む黒褐色土 (10YR3/2) で、P6号・P7号柱穴址の覆土はシルトを多量に含み、炭化材微小片を微量含む黒色土 (10YR2/2)、P8号柱穴址の覆土は中砂を多量含み、炭化材微小片を微量含む黒褐色土 (10YR2/3)、P9号・P10号・P17号・P18号・P19号・P25号柱穴址は、中砂を少量含み、細礫と炭化材微小片を微量含む黒褐色シルト質土 (10YR3/2)、P11号・P12号・P13号・P14号・P15号・P16号・P20号・P22号・P23号・P24号柱穴址は、中砂と細礫・炭化材微小片を微量含む黒褐色土 (10YR2/2)、P21号柱穴址は粗砂を多量、シルトを少量、炭化材微小片を微量含む暗褐色土 (10YR3/3) であった。覆土中に柱痕は認められなかったが、P4号・P5号・P8号・P13号・P15号・P17号・P18号・P23号柱穴址では、底面が硬化し、柱を据えていた痕跡が伺えた。

遺物はP5号柱穴址より寛永通宝断片が、P24号柱穴址からかわらけ片が出土しているのみである。

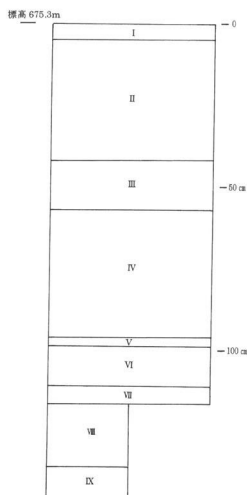
所属時期は、P5号柱穴址が近世、P24号柱穴址が中世と考えられる他は不明である。



第13図 調査第④区全体図 (1:100)



第17図 調査第⑤区層序



第15図 調査第④区層序



第16図 調査第⑤区全体図 (1:100)

### 3 調査第④区

調査第④区は野沢館跡東側中央に位置する。

土層は調査区の東側で観察した。確認面までの土層は4層に分割された。第Ⅰ層はアスファルト層、第Ⅱ層は碎石層であった。第Ⅲ層は道路工事時の整地層と考えられる暗褐色土層 (7.5YR3/3) で、第Ⅳ層は近代以降の整地層で多量の石炭燃焼屑を含む黒褐色 (10YR2/2) ・黄灰色 (2.5Y6/1) ・褐色土層 (10YR4/4) であった。また確認面以下の地山について部分的に掘り込みを行い、5層を確認した。いずれも河川堆積層であった。第Ⅴ層はシルトと粘土を微量含む灰黄褐色砂層 (10YR4/2)、第Ⅵ層は粘土を少量含む暗褐色シルト層 (10YR3/3)、第Ⅶ層はシルトを少量含む褐色粘土層 (7.5YR4/4)、第Ⅷ層は中砂を少量含む褐色シルト層 (7.5YR6/4)、第Ⅸ層はシルトを少量含む褐灰色砂層 (7.5YR4/1) であった。

調査区内は、下水道・排水溝・水道・不明攪乱により7割近くが破壊されていた。調査区東側で到達した確認面、層序第Ⅴ層中および第Ⅵ層上面において確認作業を行ったが遺構は確認されなかった。外郭の堀の西側立ち上がりは検出されず、また他の遺構も検出されなかったため、調査区の東側に想定されている外郭の土塁が存在していた可能性が高い。なお、調査区の西側の攪乱は第Ⅱ層直下より続き、現代陶磁器片やプラスチックが含まれていた。この攪乱は調査第⑤区で確認された不明な攪乱と同種と考えられる。

遺物は、中世の土鍋片、近世の瀬戸系灰釉片、近世から近代の陶磁器破片などが出土した。

## 4 調査第⑤区

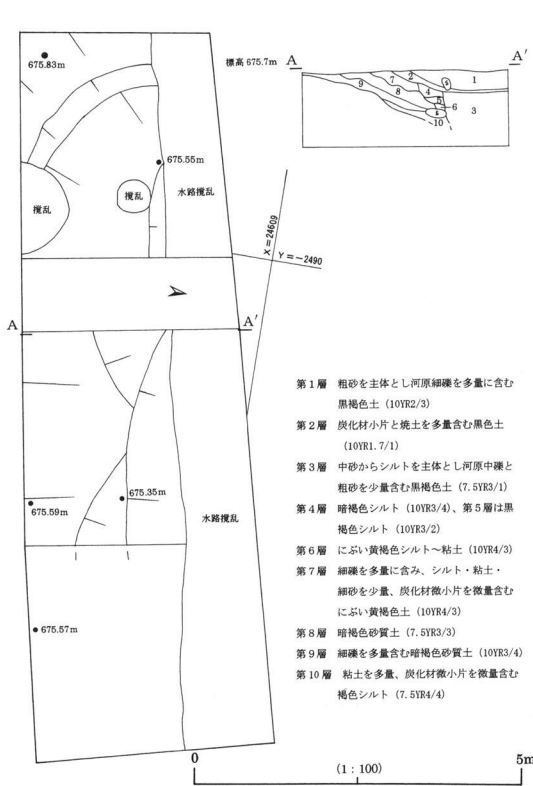
調査第⑤区は野沢館跡東側中央に位置し、主郭堀に近接する。

本調査区では、主郭東堀のライン検出が想定されていたが、調査区全体に攪乱が及んでおり、遺構を確認することができなかった。

土層は調査区の西側で観察し、5層に分割された。第Ⅰ層はアスファルト層、第Ⅱ層は碎石層、第Ⅲ層は上下水道敷設時の攪乱碎石層である。第Ⅳ層は整地層で細礫と中砂～シルトを主体とする暗褐色土(10YR3/3)で、第Ⅴ層は小～中礫を多量、中砂からシルトを少量含む暗褐色土(10YR3/3)から黒褐色土(10YR2/3)であった。

遺物は近世から近代の陶磁器が出土した。

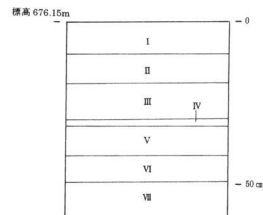
## 5 調査第⑥西区



第18図 調査第⑥西区全体図(1:100)

V層は整地層で粗砂と細礫を多量に含む暗褐色土(10YR3/4)、第VI層は堀覆土第9層で、第VII層は地山で小礫を少量含む褐色シルト(7.5YR4/6)である。

堀の土層は調査区西側で観察し、10層に分割された。第1層は粗砂を主体とし河原細礫を多量に含む黒褐色土(10YR2/3)、第2層は炭化材小片と焼土を多量含む黒色土(10YR1.7/1)、第3層は中砂からシルトを



第19図 調査第⑥西区層序

調査第⑥西区は野沢館跡南西部に位置し、主郭南西堀に近接する。

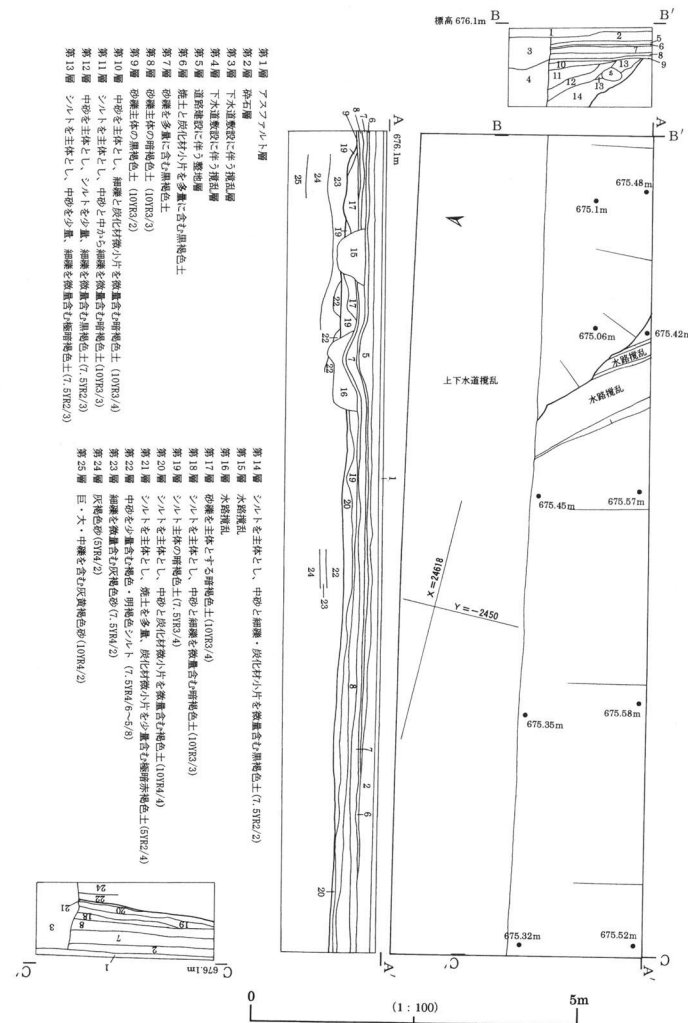
本調査区では、主郭堀の南西部の法面と堀の南法面を確認することができた。南西部法面は北東方向に緩やかにレベルを下げ、南法面は北方向緩やかにレベルを下げる。調査区北側で近代以降の水路による攪乱が東西方向に検出され、堀の法面を破壊している。

調査区の土層は南側中央で観察し、7層に分割された。第Ⅰ層はアスファルト層、第Ⅱ層は碎石層、第Ⅲ層は整地層で粗砂から中砂を多量含む暗褐色土(10YR3/3)、第Ⅳ層は炭化材小片から微小片と焼土主体の黒色土(10YR2/1)、第

主体とし河原中礫と粗砂を少量含む黒褐色土 (7.5YR3/1)、第4層は暗褐色シルト (10YR3/4)、第5層は黒褐色シルト (10YR3/2)、第6層はにぶい黄褐色シルト～粘土 (10YR4/3) である。いずれも攪乱水路に関係する土層で、第4～6層は水路構築土と考えられる。第3層からは近代以降の陶磁器が多量に出土した。第7層は細礫を多量に含み、シルト・粘土・細砂を少量、炭化材微小片を微量含むにぶい黄褐色土 (10YR4/3)、第8層は暗褐色砂質土 (7.5YR3/3)、第9層は細礫を多量含む暗褐色砂質土 (10YR3/4)、第10層は粘土を多量、炭化材微小片を微量含む褐色シルト (7.5YR4/4) である。この4層は堀の覆土と考えられる。

遺物は堀覆土・検出面から土鍋・かわらけ・陶器といった中世遺物が、他から近世～近代以降の陶磁器が出土した。

## 6 調査第⑥中央区



第20図 調査第⑥中央区全体図 (1:100)

調査第⑥中央区は野沢館跡中央部に位置し、主郭南堀に近接する。野沢館跡Ⅳで土橋が検出された部分に接した南側である。

調査区の土層は堀の覆土を含め25層を確認した。第1層はアスファルト層、第2層は碎石層、第3層と第4層は下水道敷設に伴う攪乱層、第5層は道路建設に伴う整地層、第6層は焼土と炭化材小片を多量に含む黒褐色土、第7層上面が旧道路使用面、第7層は砂礫を多量に含む黒褐色土、第8層は砂礫主体の暗褐色土 (10YR3/3)、第9層は砂礫主体の黒褐色土 (10YR3/2)、第10層は中砂を主体とし、細礫と炭化材微小片を微量含む暗褐色土 (10YR3/4)、第11層はシルトを主体とし、中砂と中から細礫を微量含む暗褐色土 (10YR3/3)、第12層は中砂を主体とし、シルトを少量、細礫を微量含む黒褐色土 (7.5YR2/3)、第13層はシルトを主体とし、中砂を少量、細礫を微量含む極暗褐色土 (7.5YR2/3)、第14層はシルトを主体とし、中砂と

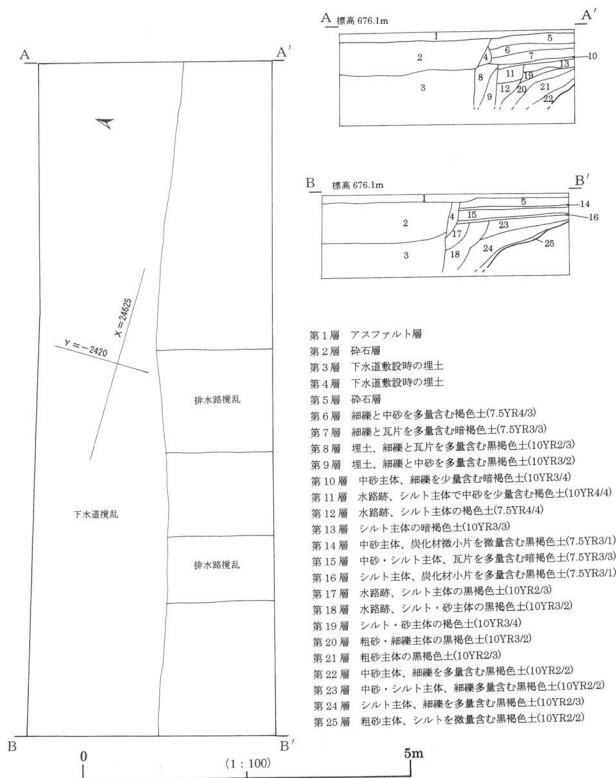
細礫・炭化材小片を微量含む黒褐色土 (7.5YR2/2)、第15層と第16層は水路攪乱、第17層は砂礫を主体とす

る暗褐色土 (10YR3/4)、第18層はシルトを主体とし、中砂と細礫を微量含む暗褐色土 (10YR3/3)、第19層はシルト主体の暗褐色土 (7.5YR3/4)、第20層はシルトを主体とし、中砂と炭化材微小片を微量含む褐色土 (10YR4/4)、第21層はシルトを主体とし、焼土を多量、炭化材微小片を少量含む極暗赤褐色土 (5YR2/4)、第22層は中砂を少量含む褐色・明褐色シルト (7.5YR4/6~5/8)、第23層は細礫を微量含む灰褐色砂 (7.5YR4/2)、第24層は灰褐色砂 (5YR4/2)、第25層は巨・大・中礫を含む灰黄褐色砂 (10YR4/2) である。第10~14層、第18~20層が堀の覆土で、第22~25層は地山である。また第17層は二次堆積層で第19層を大きく破壊していた。第21層は西側を中心に硬化していた。

検出された堀は2種類である。第1の堀は中央の水路攪乱より西側で検出された堀で、調査第⑥西区で検出された堀と同じ形態を示し、緩やかに北方に向かってレベルを低下させている。その法面は固く硬化して使用風化面を想定させる。第2の堀は水路東側で検出された堀で、調査第⑥東区で検出された堀と同じ形態を示し、急傾斜の法面を持つ。

遺物は堀の覆土から中世の土鍋片、整地層から近世以降の陶磁器の破片が出土した。

## 7 調査第⑥東区



第21図 調査第⑥東区全体図 (1:100)

第1層 アスファルト層  
 第2層 砕石層  
 第3層 下水道敷設時の埋土  
 第4層 下水道敷設時の埋土  
 第5層 砕石層  
 第6層 細礫と中砂を多量含む褐色土(7.5YR4/3)  
 第7層 細礫と瓦片を多量含む暗褐色土(7.5YR3/3)  
 第8層 埋土、細礫と瓦片を多量含む黒褐色土(10YR2/3)  
 第9層 埋土、細礫と中砂を多量含む黒褐色土(10YR3/2)  
 第10層 中砂主体、細礫を少量含む暗褐色土(10YR3/4)  
 第11層 水路跡、シルト主体で中砂を少量含む褐色土(10YR4/4)  
 第12層 水路跡、シルト主体の褐色土(7.5YR4/4)  
 第13層 シルト主体の暗褐色土(10YR3/3)  
 第14層 中砂主体、炭化材微小片を微量含む黒褐色土(7.5YR3/1)  
 第15層 中砂・シルト主体、瓦片を多量含む暗褐色土(7.5YR3/3)  
 第16層 シルト主体、炭化材微小片を多量含む黒褐色土(7.5YR3/1)  
 第17層 水路跡、シルト主体の黒褐色土(10YR2/3)  
 第18層 水路跡、シルト・砂主体の黒褐色土(10YR3/2)  
 第19層 シルト・砂主体の褐色土(10YR3/4)  
 第20層 粗砂・細礫主体の黒褐色土(10YR2/2)  
 第21層 粗砂主体の黒褐色土(10YR2/3)  
 第22層 中砂主体、細礫を多量含む褐色土(10YR2/2)  
 第23層 中砂・シルト主体、細礫多量含む暗褐色土(10YR2/2)  
 第24層 シルト主体、細礫を多量含む黒褐色土(10YR2/3)  
 第25層 粗砂主体、シルトを微量含む黒褐色土(10YR2/2)

調査第⑥東区は野沢館跡の南側やや東よりに位置し、主郭南側の堀に接する。

調査区内は北側半分を下水道敷設時の攪乱により破壊され、南側の排水路の攪乱を免れた部分より堀の覆土が確認された。

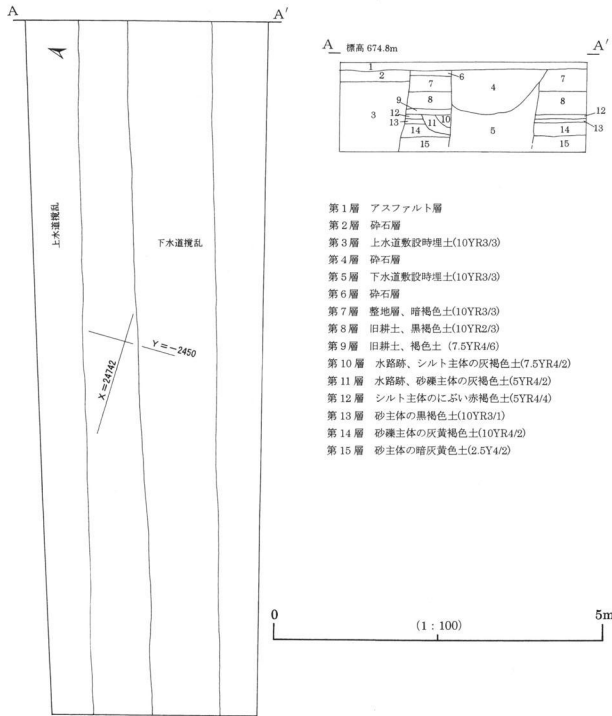
調査区の土層は堀の覆土を含め25層を確認した。第1層はアスファルト層、第2層と第5層は砕石層、第3層と第4層は下水道敷設時の人為的埋土、第6層は整地層で細礫と中砂を多量含む褐色土、第7層は整地層で細礫と瓦片を多量含む暗褐色土、第8層は細礫と瓦片を多量含む黒褐色土、第9層は細礫と中砂を多量含む黒褐色土で、第8層とともに水路の人為的埋土と考えられる。第10層は中砂を主体とし、細礫を少量含む暗褐色土、第11層は水路跡で、中砂を少量含むシルト主体の褐色土、第12層は水路跡で、シルト主体の褐色土、第13層はシルト主体の暗褐色土、第14層は中砂主体で炭化材微小

は粗砂主体の黒褐色土、第22層は中砂主体で、細礫を多量含む黒褐色土、第23層は中砂とシルトを主体とし、細礫を多量含む黒褐色土、第24層はシルトを主体とし、細礫を多量含む黒褐色土、第25層は粗砂を主体とし、シルトを微量含む黒褐色土である。このうち第13層・第19～25層が堀の覆土である。

検出された堀は調査第⑥中央区の東側で検出の法面急傾斜堀と同じと考えられる。

遺物は堀覆土第20層を主として土鍋片が、他整地層を中心に近世以降の陶磁器が出土した。

## 8 調査第⑦東区



第22図 調査第⑦東区全体図 (1:100)

- 第1層 アスファルト層
- 第2層 砕石層
- 第3層 上水道敷設時埋土(10YR3/3)
- 第4層 砕石層
- 第5層 下水道敷設時埋土(10YR3/3)
- 第6層 砕石層
- 第7層 整地層、暗褐色土(10YR3/3)
- 第8層 旧耕作土、黒褐色土(10YR2/3)
- 第9層 旧耕作土、褐色土(7.5YR4/6)
- 第10層 水路跡、シルト主体の灰褐色土(7.5YR4/2)
- 第11層 水路跡、砂礫主体の灰褐色土(5YR4/2)
- 第12層 シルト主体の赤褐色土(5YR4/4)
- 第13層 砂主体の黒褐色土(10YR3/1)
- 第14層 砂礫主体の灰黄褐色土(10YR4/2)
- 第15層 砂主体の暗灰黄色土(2.5Y4/2)

調査第⑦東区は野沢館跡の北側に位置し、主郭北側の堀に接する。

調査区内は北側を上水道敷設時の攪乱で、中央部を下水道敷設時の攪乱により破壊される。

調査区内の土層は15層に分割された。第1層はアスファルト層、第2層・第4層・第6層は砕石層である。第3層は上水道敷設時の埋土、第5層は下水道敷設時の埋土、第7層は整地層(暗褐色土)、第8層は旧耕作土(黒褐色土)、第9層は旧耕作土(褐色土)、第10層は水路跡で、シルトを主体とする灰褐色土、第11層は水路跡で、砂礫を主体とする灰褐色土、第12層はシルト主体の赤褐色土、第13層は砂主体の黒褐色土、第14層は砂礫主体の灰黄褐色土、第15層は砂主体の暗灰黄色土である。第12層～第15層が堀の覆土と考えられるが、水平に堆積した層であり、また確

認範囲が限られているため断定はできない。

遺物は整地層・旧耕土層より近世以降の陶磁器が出土した。

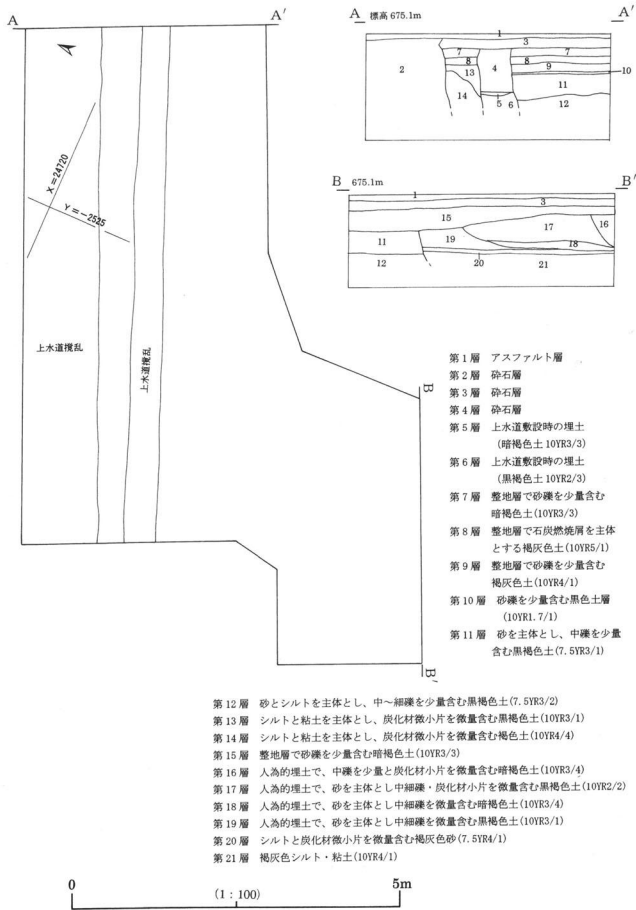
## 9 調査第⑦西区

調査第⑦西区は野沢館跡の北側に位置し、主郭北側の堀に接する。

調査区内は北側を上水道敷設時の攪乱によって破壊される。

調査区内の土層は21層に分割された。第1層はアスファルト層、第2層・第3層・第4層は砕石層、第5層は上水道敷設時の埋土(暗褐色土)、第6層は上水道敷設時の埋土(黒褐色土)である。第7層は整地層で砂礫を少量含む暗褐色土、第8層は整地層で石炭燃焼屑を主体とする褐灰色土、第9層は整地層で砂礫を少量含む





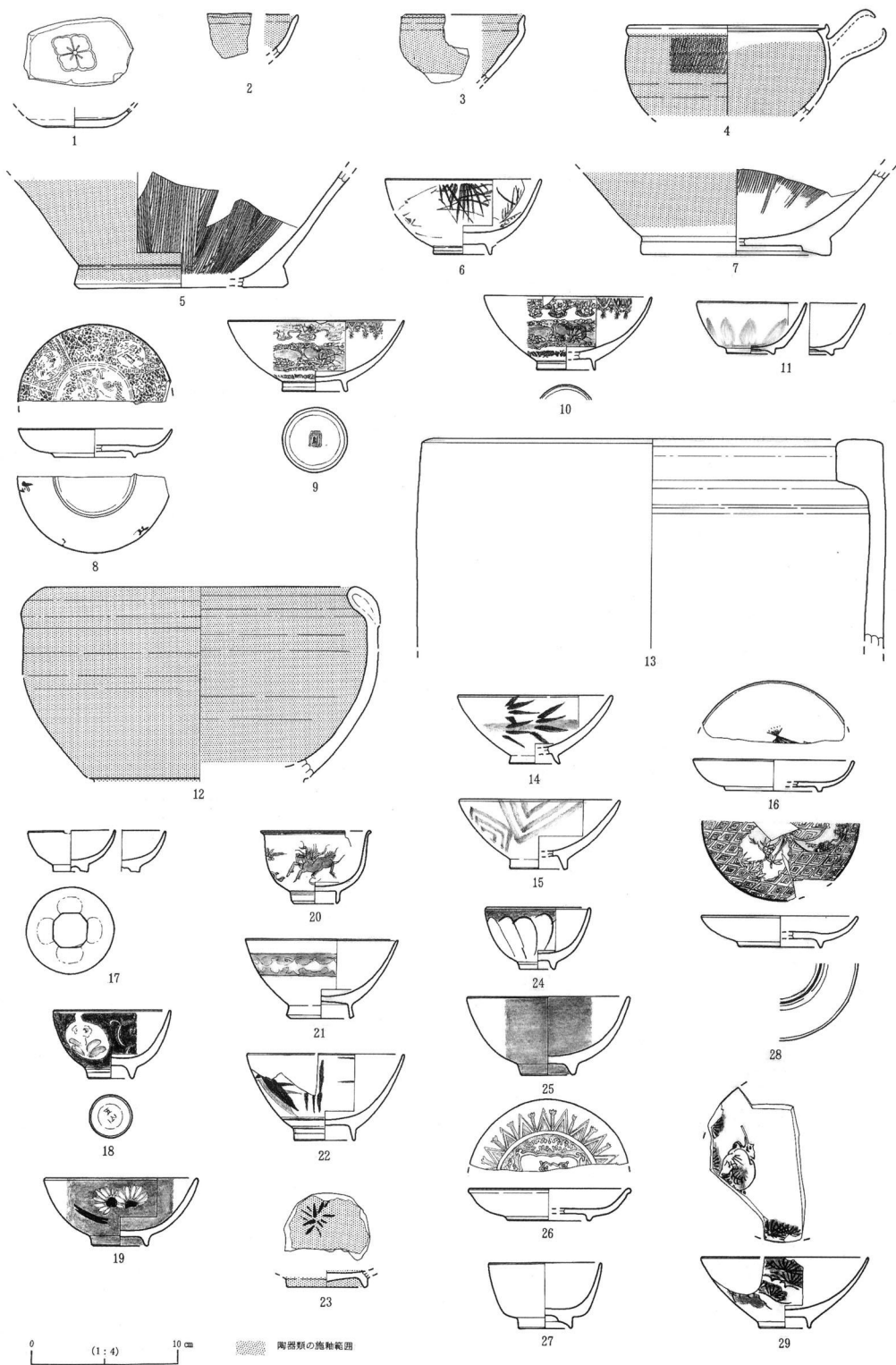
第23図 調査第⑦西区全体図 (1:100)

遺物は茶臼と粉引臼、近世以降の陶磁器が出土している。

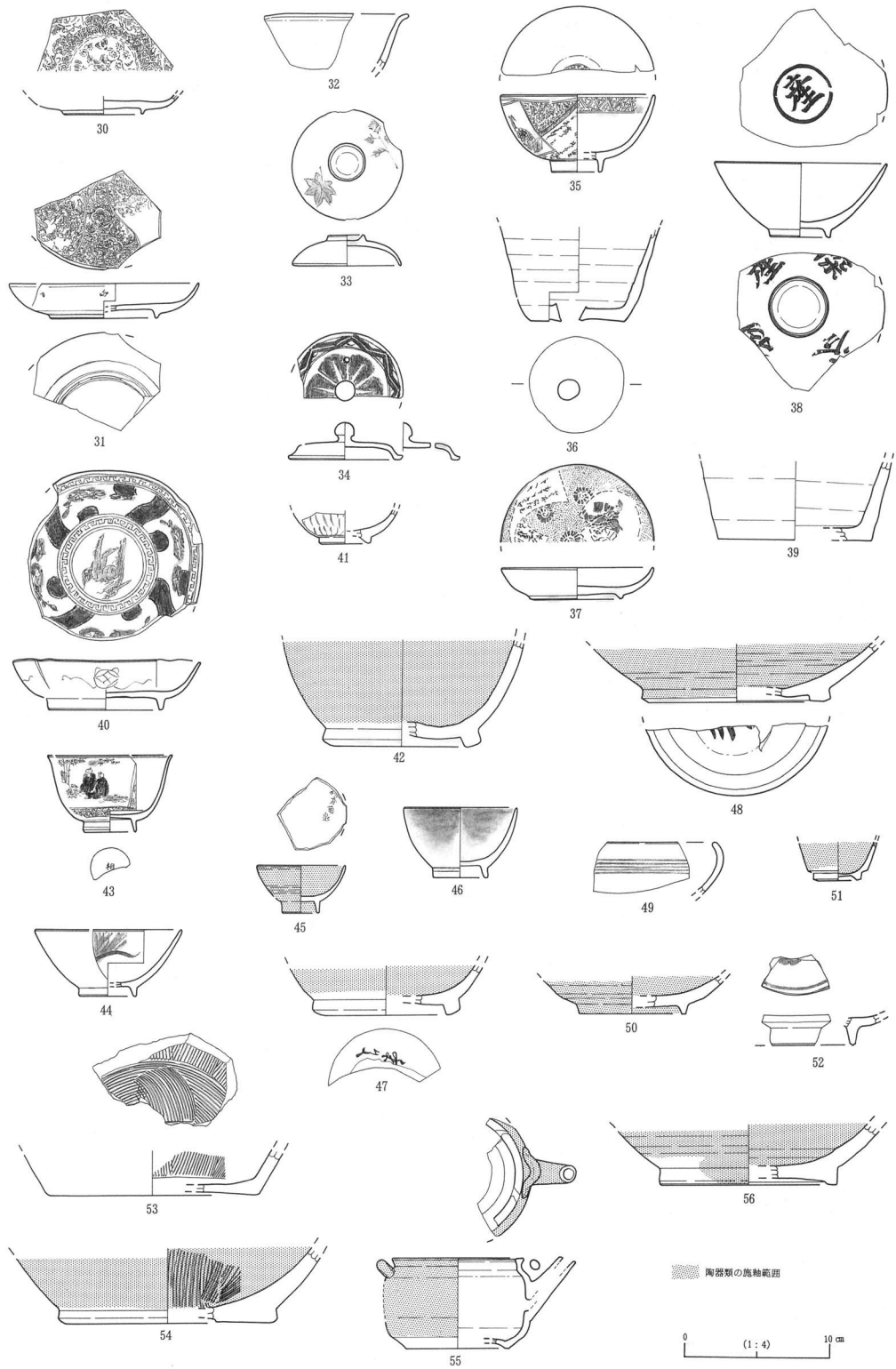
第2表 出土遺物一覧表

挿図番号	調査区	種別	所属時期	特徴
24-1	第①区	かわらけ	不明	白色素焼き。内面中央に花菱文。石組遺構検出面
24-2	第①区	天目茶碗	中世	瀬戸系。小型。S1号石組遺構
24-3	第①区	天目茶碗	中世	瀬戸系。S1号石組遺構
24-4	第①区	行平鍋	近代以降	陶器、鉄釉。表土整地層
24-5	第①区	すり鉢	近代以降	陶器、鉄釉。表土整地層
24-6	第①区	碗	近世	染付磁器。表土整地層
24-7	第①区	すり鉢	近代以降	陶器、鉄釉。表土整地層
24-8	第①区	皿	近代以降	磁器。表土整地層
24-9	第①区	碗	近代以降	磁器。表土整地層
24-10	第①区	碗	近代以降	磁器。表土整地層
24-11	第①区	青磁小碗	近代以降	青磁、蓮弁様。表土整地層
24-12	第①区	火鉢	近代以降	灰釉陶器。表土整地層
24-13	第①区	火鉢	近世以降	素焼き陶器。表土整地層
24-14	第④区	碗	近代以降	磁器。整地層
24-15	第④区	碗	近代以降	磁器。整地層

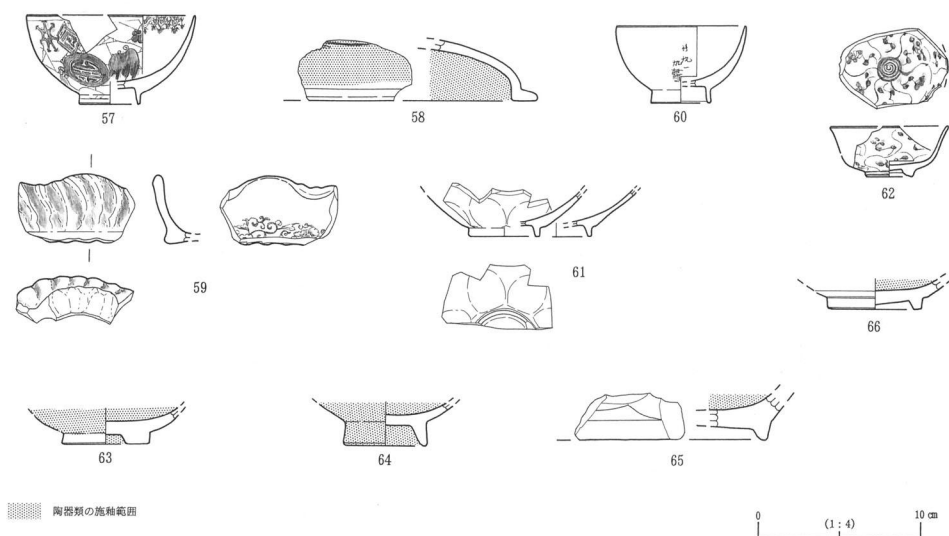
褐灰色土、第10層は砂礫を少量含む黒色土層、第11層は砂を主体とし、中礫を少量含む黒褐色土、第12層は砂とシルトを主体とし、中～細礫を少量含む黒褐色土、第13層はシルトと粘土を主体とし、炭化材微小片を微量含む黒褐色土、第14層はシルトと粘土を主体とし、炭化材微小片を微量含む褐色土、第15層は整地層で砂礫を少量含む暗褐色土、第16層は人為的埋土で、中礫を少量と炭化材小片を微量含む暗褐色土、第17層は人為的埋土で、砂を主体とし中細礫・炭化材小片を微量含む黒褐色土、第18層は人為的埋土で、砂を主体とし中細礫を微量含む暗褐色土、第19層は人為的埋土で、砂を主体とし中細礫を微量含む黒褐色土、第20層はシルトと炭化材微小片を微量含む褐色砂、第21層は褐色シルト・粘土である。第20層と第21層は水中堆積層で、池あるいは水田が考えられる。第16層～第19層は人為的埋土で、池あるいは水田を埋め立てた際に成立した土層と考えられる。



第24図 出土遺物実測図



第25図 出土遺物実測図



第26図 出土遺物実測図

第3表 出土遺物一覧表

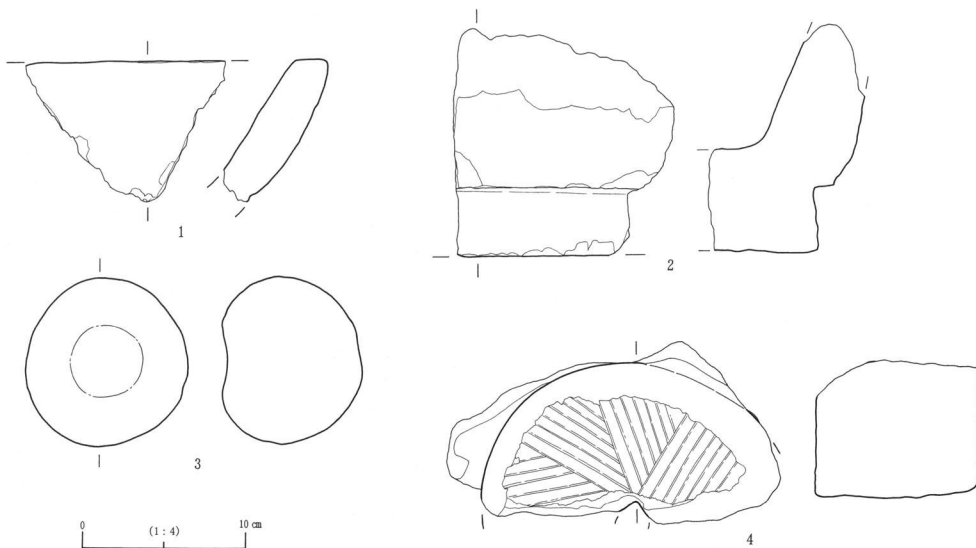
挿図番号	調査区	種別	所属時期	特徴
24-16	第④区	皿	近代以降	染付磁器。整地層
24-17	第⑥西区	白磁小碗	近代以降	高台部隅丸方形。水路攪乱
24-18	第⑥西区	小碗	近代以降	染付磁器。水路攪乱
24-19	第⑥西区	碗	近代以降	緑釉、磁器。水路攪乱
24-20	第⑥西区	小碗	近世末	肥前系染付磁器
24-21	第⑥西区	碗	近代以降？	染付磁器。水路攪乱
24-22	第⑥西区	碗	近代以降	磁器。水路攪乱
24-23	第⑥西区	碗	近世	瀬戸美濃系灰釉陶器。水路攪乱
24-24	第⑥西区	碗	近世末	肥前系染付磁器。水路攪乱
24-25	第⑥西区	碗	近代以降	緑色釉、磁器。水路攪乱
24-26	第⑥西区	皿	近代以降	磁器。水路攪乱
24-27	第⑥西区	白磁小碗	近代以降	水路攪乱
24-28	第⑥中央区	皿	近代以降	磁器。整地層
24-29	第⑥西区	碗	近世以降	染付磁器。水路攪乱
25-30	第⑥西区	皿	近代以降	磁器。水路攪乱
25-31	第⑥西区	皿	近代以降	磁器。水路攪乱
25-32	第⑥西区	青磁碗	近世以降	片口碗。水路攪乱
25-33	第⑥西区	蓋	近代以降	染付磁器。水路攪乱
25-34	第⑥西区	蓋	近代以降	染付磁器。水路攪乱
25-35	第⑥西区	碗	近代以降	磁器。水路攪乱
25-36	第⑥西区	植木鉢	近世以降	素焼き、底部回転糸切。水路攪乱
25-37	第⑥西区	皿	近代以降	磁器。水路攪乱
25-38	第⑥西区	碗	近代以降	磁器、「深谷物産」。水路攪乱
25-39	第⑥西区	甕	近世	素焼き、ロクロナデ。水路攪乱
25-40	第⑥西区	皿	近世以降	染付磁器、輪花口縁。水路攪乱
25-41	第⑥西区	青磁小碗	近代以降	水路攪乱
25-42	第⑥西区	甕	近代以降	陶器、鉄釉。堀確認面
25-43	第⑥西区	小碗	近代以降	磁器。水路攪乱
25-44	第⑥西区	碗	近代以降	磁器。水路攪乱
25-45	第⑥西区	小碗	近代以降	瀬戸美濃系陶器、「本菊泉」。水路攪乱
25-46	第⑥西区	小碗	近代以降	磁器。水路攪乱

第4表 出土遺物一覧表

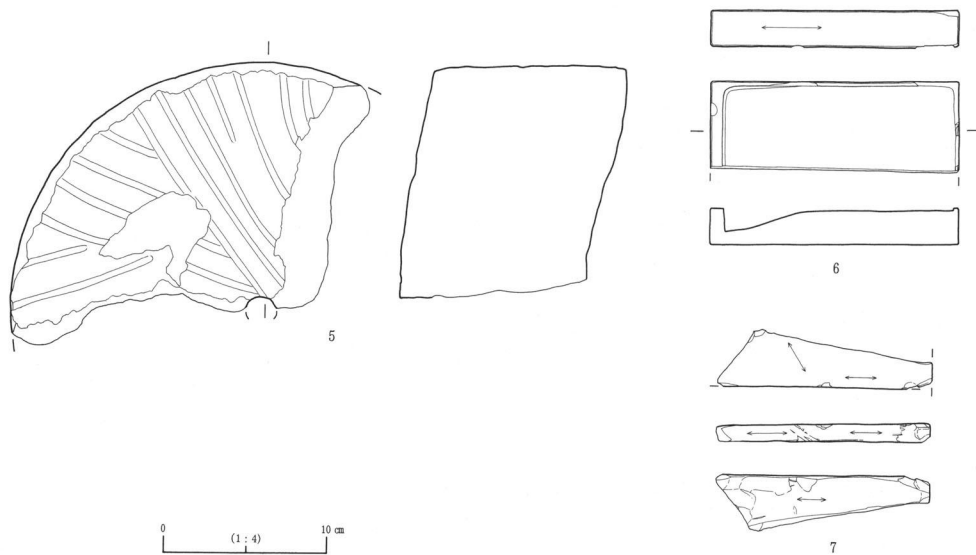
挿図番号	調査区	種別	所属時期	特徴
25-47	第⑥西区	甕	近代?	鉄釉陶器、底部に不明墨書あり。水路攪乱
25-48	第⑥西区	甕	近代?	灰釉陶器、底部に不明墨書あり。水路攪乱
25-49	第⑥西区	白磁碗	近世以降	水路攪乱
25-50	第⑥西区	皿	近代以降	陶器。水路攪乱
25-51	第⑥西区	小碗	近代以降	陶器、褐黒灰色釉。水路攪乱
25-52	第⑥西区	青磁皿	近代以降	水路攪乱
25-53	第⑥西区	すり鉢	近代以降	焼締。水路攪乱
25-54	第⑥西区	すり鉢	近代以降	鉄釉、陶器。水路攪乱
25-55	第⑥西区	土瓶	不明	灰白色釉。水路攪乱
25-56	第⑥西区	甕	中世後半	瀬戸美濃系灰釉陶器、堀確認面出土
26-57	第⑦西区	碗	近代以降	磁器。整地層
26-58	第⑦西区	蓋	不明	土鍋蓋、陶器。整地層
26-59	第⑦西区	青磁碗	近代以降	整地層
26-60	第⑦西区	白磁小碗	近代以降	整地層
26-61	第⑦西区	向付碗	近世以降	白磁。整地層
26-62	第⑦西区	小碗	近代以降	染付磁器。整地層
26-63	第⑦西区	天目茶碗	近世	瀬戸美濃系陶器。整地層
26-64	第⑦西区	丸碗	近世	瀬戸美濃系灰釉陶器。整地層
26-65	第⑦西区	甕	近世以降	鉄釉、陶器。内面鉄釉。整地層
26-66	第⑦東区	丸碗	近世中期	瀬戸美濃系灰釉陶器。整地層

第5表 出土石製品一覧表

挿図番号	調査区	種別	所属時期	特徴
27-1	第①区	すり鉢	中世	黒色多孔質安山岩。石組遺構
27-2	第①区	すり鉢	中世	輝石安山岩。石組遺構
27-3	第⑥西区	敲き石	不明	角閃石安山岩。確認面
27-4	第⑥西区	茶臼	不明	輝石安山岩。整地層
28-5	第⑦西区	粉引き臼	不明	下臼、輝石安山岩
28-6	第⑥西区	硯	不明	粘板岩。水路攪乱
28-7	第⑥西区	砥石	不明	凝灰岩。水路攪乱



第27図 石製品実測図



第28図 石製品実測図

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

野沢館跡Ⅶは、佐久市建設部都市計画課が行う国庫補助街づくり総合支援事業「野沢散策路事業」に伴い、保護協議の結果、上下水道・ガス・水路・排水路等の破壊を免れている部分、野沢館跡として重要な部分などに調査区を絞り込み、確認調査および発掘調査を行った。調査を予定していた7地区10地点の内2地点は調査前の詳細踏査等により全面を攪乱に破壊されているものと考えられたため調査をひかえた。

調査第①区では、前述各攪乱を免れて、中世から近世にかけての柱穴址群と中世以降と考えられる石組遺構が検出された。野沢館跡Ⅲの調査でも中世から近世の遺構群が検出されており、付近には中世から近世の建物群が展開していることが判明した。調査第④区では遺構が検出されず、外郭外堀に接することから、想定されている外郭外側の土塁部分に当たると推定される。調査第⑤区は全面攪乱を受けており、予想された堀の東側ラインが検出できなかったが、堀の深度は2m以上あると予想されるため、調査を控えた深度以降で堀が検出される可能性は残る。調査⑥区では、中央部を境に2種類の堀の南側・南西法面が確認された。これにより主郭南側の堀は、検出された法面の延長より推定し、道路と南敷地の境目あたりにラインを想定することができそうである。また中央部では下水道の攪乱により、野沢館跡Ⅳで検出された土橋の続きを検出することはできなかった。東側で検出された法面が急な堀は、野沢館跡Ⅳで検出された堀の北法面の傾斜とは対応しない。さらに地山は河川堆積土であり、この傾斜では崩れてしまい堀としてはその機能は発揮できないと考えられる。覆土の堀下げを行っている最中も崩れやすく調査を難航させた。雨など降ればかなり崩壊してしまうと考えられる。この傾斜で堀・水路として利用するためには石を組むか粘土を貼り付けるかなくてはならないだろう。こうしたことより、この急傾斜の堀は、野沢城の時代に掘られたものではなく、近世に掘削された石組等を持った堀状の水路で、緩やかな傾斜をもつ中世の堀を破壊して構築されたものでは

ないかと推定される。調査⑦区では、堀北側のライン・法面ともに確認されず、堀の北側ラインは現道よりさらに北側に位置するのではないかと考えられる。

近代以降の陶磁器類については、通常調査遺物として報告書掲載は省略されるが、堀・その他以降確認までの整地層や遺構破戒層の所産期を知る上で重要な意味を持っていたため、主なもの一部について図示と写真を掲載した。図示を控えた陶磁器類はコンテナ4箱以上にのぼる。

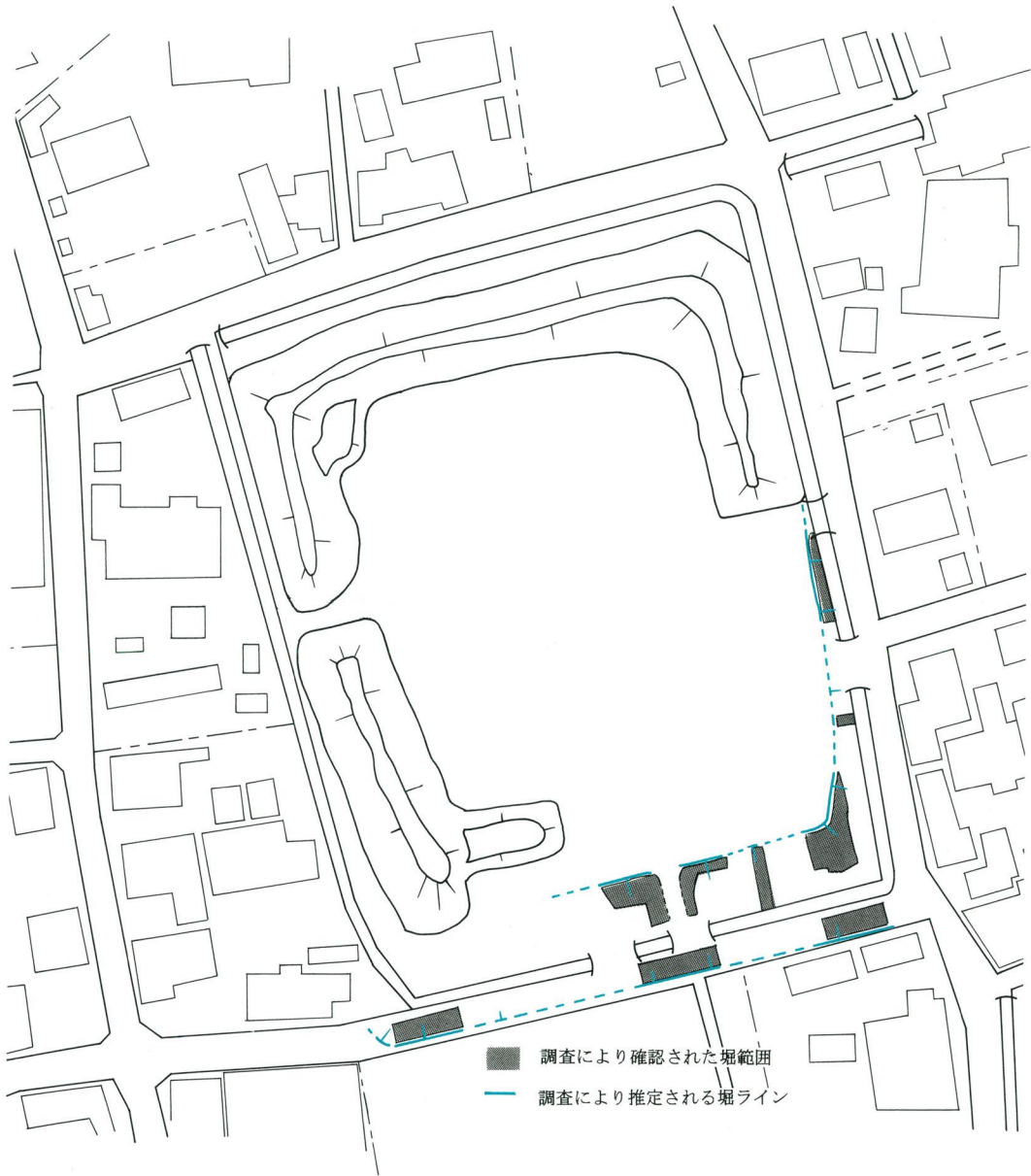
野沢館は、野沢氏の居館としての初期「野沢館」、伴野時長の居館としての前期「野沢館」、伴野長房の居館と「野沢城」としての中期「野沢館」、伴野氏滅亡後廃城までの「野沢城」としての後期「野沢館」、この4期に変遷するものと考えられる。現在までの発掘調査では、この初期「野沢館」と前期「野沢館」の存在を確実にする成果は得られてはいない。いずれも後期「野沢館」以降に帰属する成果である。前期「野沢館」期である14世紀にさかのぼるような遺物が散発的に出土しており、いずれ外郭部分やそれに接する部分ではこの時期の遺構も見つかる可能性がある。また平安時代の遺物も外郭内では散見しており、平安時代後期以降の遺構や集落が付近から見つかる可能性もある。現在佐久市内では12～13世紀、特に滋野系一族が活躍していた頃と比定される12世紀代の集落は長土呂の一部地域以外に検出されていない。馬や牧を背景に栄えていた頃であるにもかかわらず集落が検出されない。このことは土器編年や遺構の見直しが必要な今後の大きな課題であろう。

初期「野沢館」(前期～後期の主郭部分)は千曲川と平行して形成されている帯状微高地上に、主軸を地形に制約されることなく(あるいはやや制約を受けた形で)造営されている。一方の外郭部分は、帯状低地と帯状微高地にかなり制約を受け、その軸に沿うように整備されている。その軸は水の流れる軸とも一致する。このあたりに、主郭と外郭、さらに野沢城郭との軸の違いを解決する糸口がありそうである。これについては、今後調査がさらに増加し、史資料がそろうまでの課題としたい。

野沢館の前身は平安時代末期の野沢氏が居住した長方形館と考えられ、館の周囲に築地あるいは板塀を巡らし、その外側に幅の狭い水路を巡らせただけの館ではないかと推測される。7堂伽藍を持っていたとされる薬師寺は平安時代末期の1150年(久安6年)に、現在の字跡部前に再建されたと伝えられている。この7堂が地名・地形などから鑑み、野沢館を取り巻くように配置されていたと推定されるため、野沢氏の居館である初期「野沢館」が存在するのであれば、現在の主郭部分か、この付近にあったものと想定される。

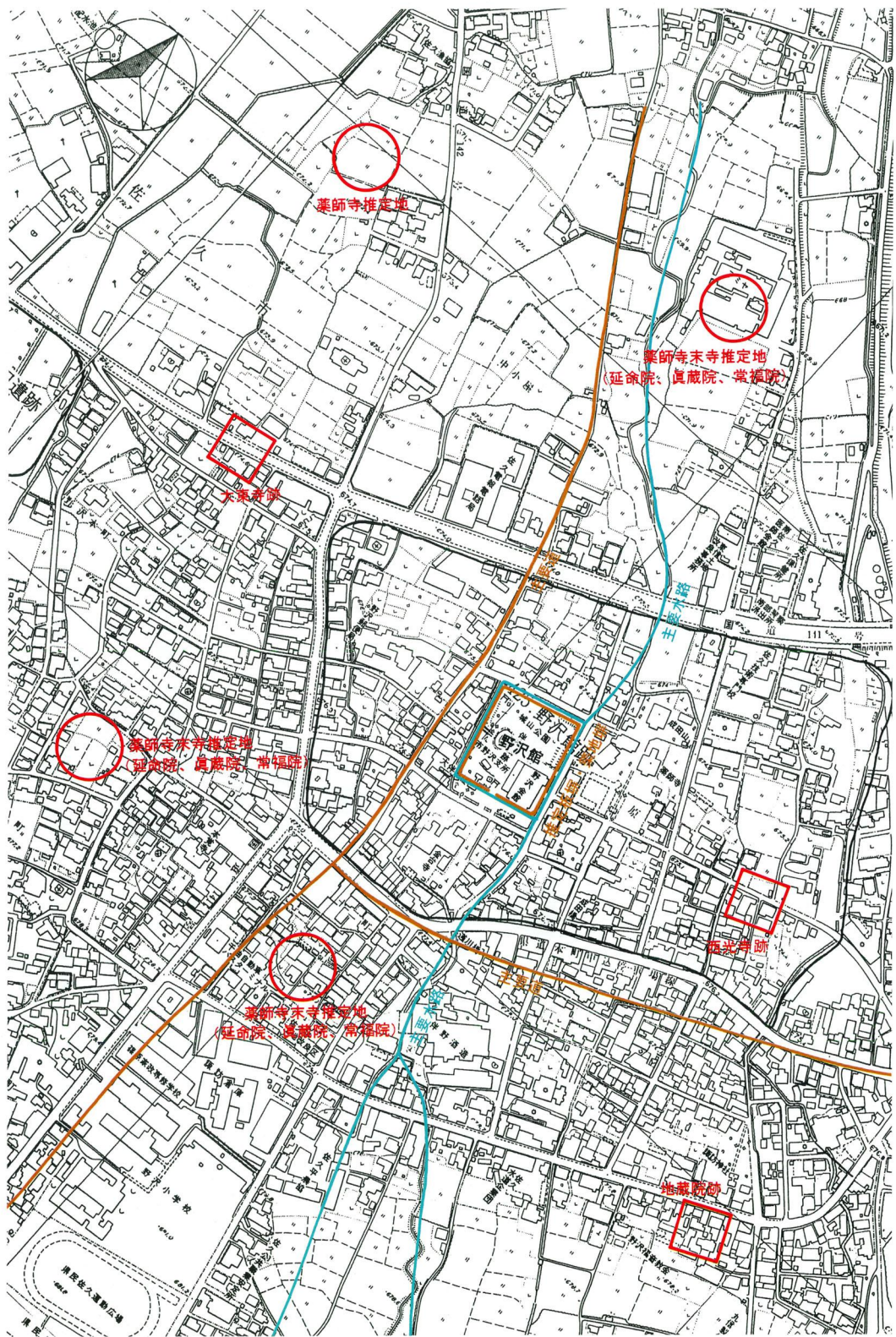
中期「野沢館」は小笠原長清・時長・時直父子孫により居館「野沢館」として一新再整備されたものと考えられるが、外郭はまだ成立していなかったか成立途中であった可能性も考えられる。後期「野沢館」は防衛を意識し、城郭「野沢城」として大整備されたものと考えられる。主郭内に土塁が築かれ、水路は深く広く掘削され、幅を大きく広げて堀となり、外郭にも土塁が築かれ、堀を巡らせたと推測される。さらに、外郭の外側部分にも手を入れ、水路を利用し、あるいは水路を整備し、町屋や職人町を整備して「野沢城」として完成させたものと推測される。

最後に、調査にあたり奔走していただいた地元区長をはじめとする区役員と大伴神社役員の方々、生活道路・通学路ということで一部通行止や迂回にご協力をいただいた沿道区民の方々には大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



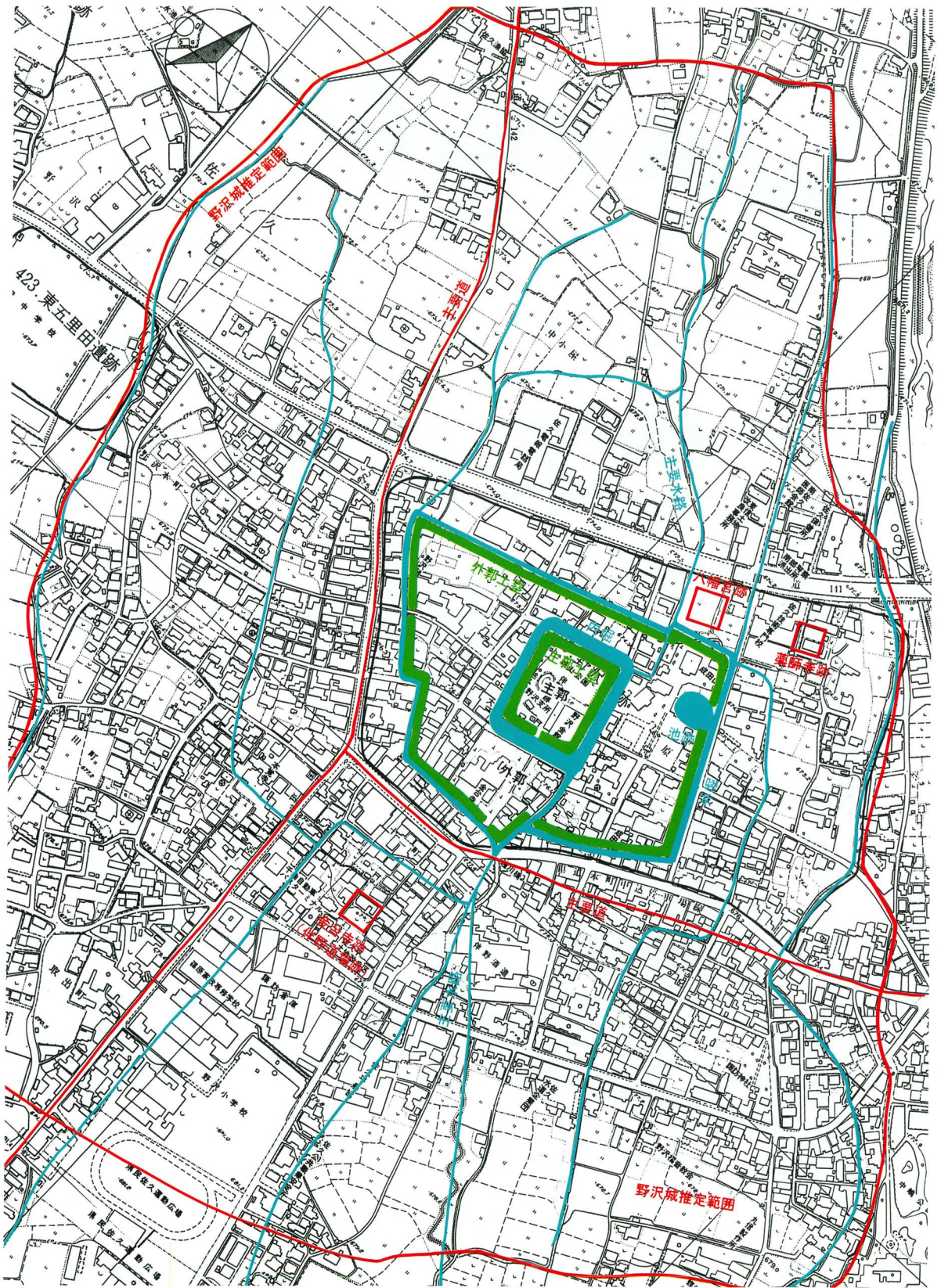
第29図 野沢館跡主郭堀推定図 (1:1,000)





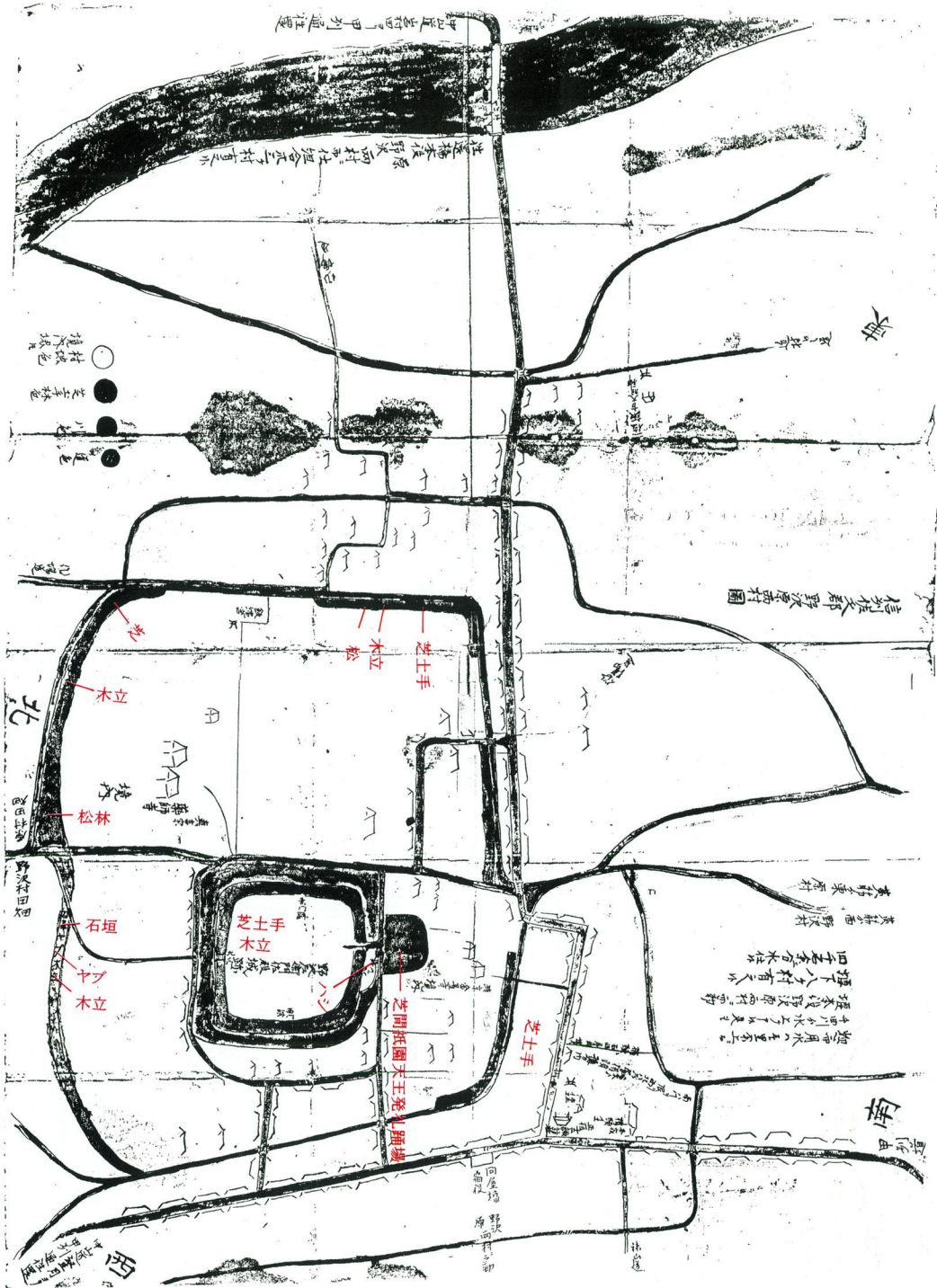
第30図 12・13世紀野沢館推定図 (1 : 5,000)





第31图 15・16世紀野沢城推定図 (1:5,000)

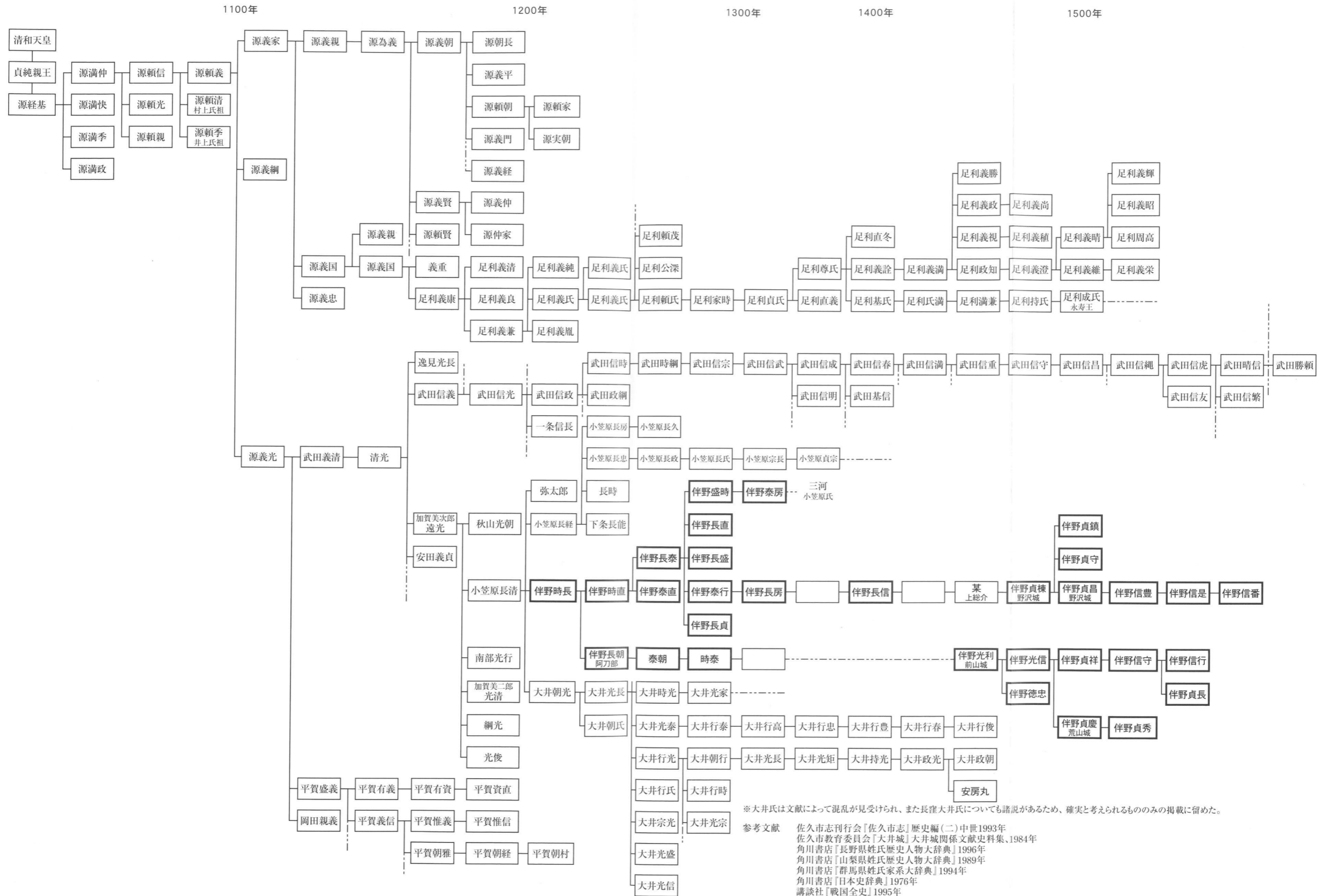




第32図 野沢城 寛延4年（宝暦元年、1751年）絵図

（原絵図を複写コピーしたものを34%に縮小）

原図では「道」が茶色、「川・水路」が水色、「芝土手・林」が緑色、「村境・境内境」が黄色に着色される。原絵図裏に「原村より差上 野沢原両村絵図 薬師寺 寛延四辛未九月日書之於江戸下谷」と書かれる。赤色表示した文字は、複写により色と重なり読みがなくなったものを記した。



※大井氏は文献によって混乱が見受けられ、また長程大井氏についても諸説があるため、確実と考えられるものみの掲載に留めた。

参考文献  
 佐久市志刊行会『佐久市志』歴史編(二)中世1993年  
 佐久市教育委員会『大井城』大井城関係文献史料集、1984年  
 角川書店『長野県姓氏歴史人物大辞典』1996年  
 角川書店『山梨県姓氏歴史人物大辞典』1989年  
 角川書店『群馬県姓氏家系大辞典』1994年  
 角川書店『日本史辞典』1976年  
 講談社『戦国全史』1995年  
 名著出版『南佐久郡志』復刻版1973年  
 下仁田町史刊行会『下仁田町史』1971年  
 甲斐郷土史研究会『高白齋記』1940年



調査第①区 調査前全景 (南より)



調査第①区 調査前全景 (北より)



調査第④区 調査前全景 (西より)



調査第⑤区 調査前全景（西より）

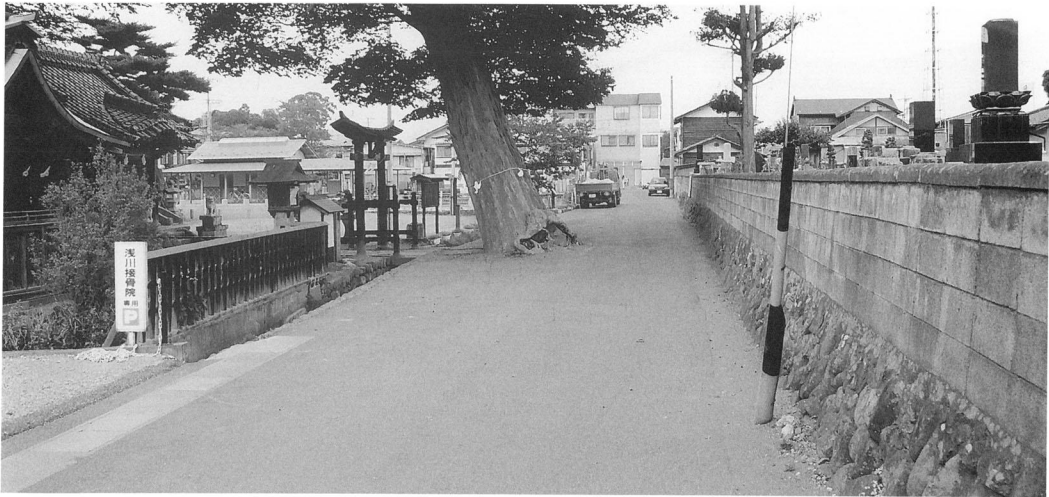


調査第③区全景（西より）



調査第④区 調査前全景（西より）





調査第⑥区 調査前全景（西より）



調査第⑥区 調査前全景（東より）



調査第⑦区 調査前全景（東より）



調査第⑦区 調査前全景（西より）



調査第①区 表土除去作業

調査第①区 表土運搬作業



調査第①区 遺構検出状況（北より）





調査第①区 遺構検出状況（南より）



調査第①区 土砂埋め戻し状況（運搬）

調査第①区 土砂埋め戻し状況



調査第①区 S1号石組遺構検出状況



調査第①区 S1号石組遺構検出状況



調査第①区 S1号石組遺構検出状況



調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S1号石組遺構検出状況（南より）



調査第①区 S1号石組遺構検出状況（北より）





調査第①区 S1号掘り下げ状況（北より）



調査第①区 S1号掘り下げ状況（北より）



調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



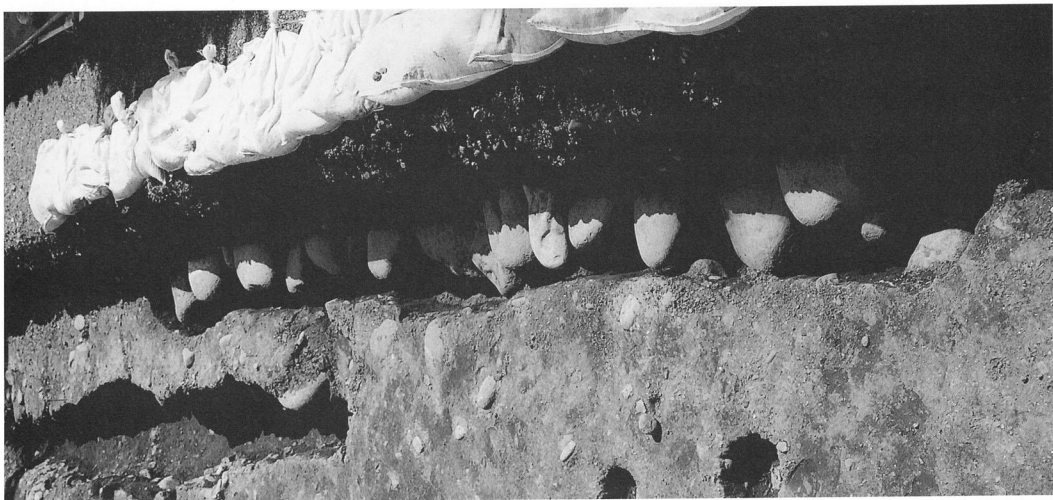
調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S2号石組遺構検出状況

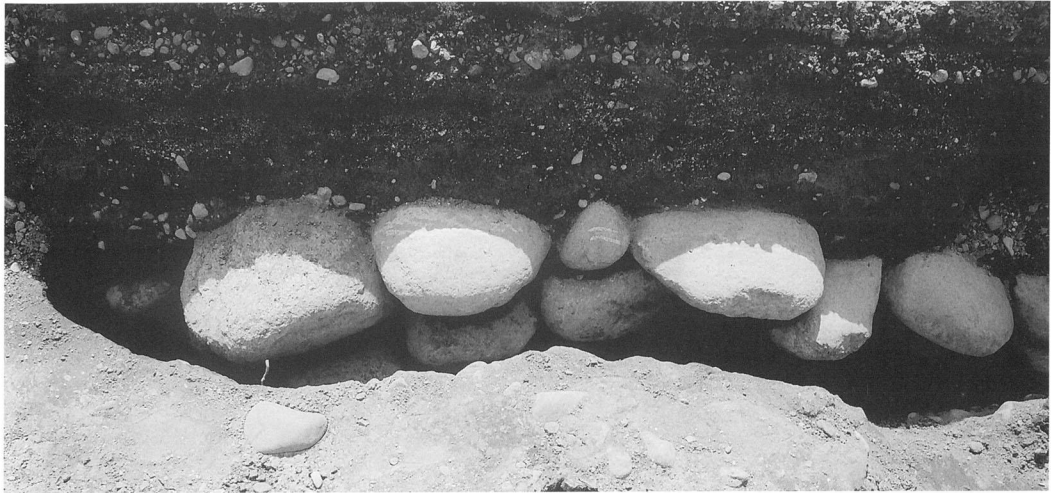




調査第①区 S1号石組遺構掘り下げ状況(中央)、S2号石組遺構検出状況(右側)



調査第①区 S1号石組遺構完掘状況(中央奥)、S2号石組遺構掘り下げ状況(手前)



調査第①区 S2号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S2号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 S2号石組遺構掘り下げ状況



調査第①区 ピット群全景（南より）



調査第①区全景（北より）





調査第①区 S1号石組遺構完掘状況（北より）



調査第④区 遺構確認状況



調査第④区 土層確認状況（東壁）



調査第④区 表土除去・土砂運搬状況



調査第④区 土砂埋め戻し状況（東より）



調査第⑤区 表土掘削状況（西より）



調査第⑤区 土層確認状況（南壁）



調査第⑤区 遺構確認状況（西より）



調査第⑥西区 表土掘削状況（西より）

調査第⑥西区 表土運搬状況（東より）



調査第⑥西区 中央部南北土層確認状況（西より）



調査第⑥西区 中央部南北土層掘覆土確認状況（東より）





調査第⑥西区 堀南西コーナー検出状況（西より）

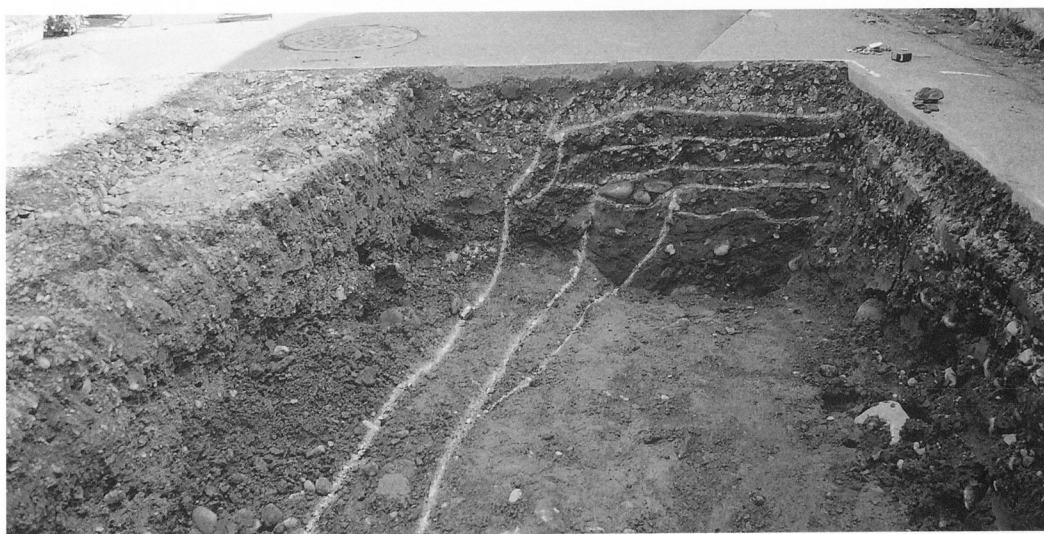


調査第⑥西区 東側検出堀落ち込み状況（北より）



調査第⑥西区 埋め戻し状況（東より）

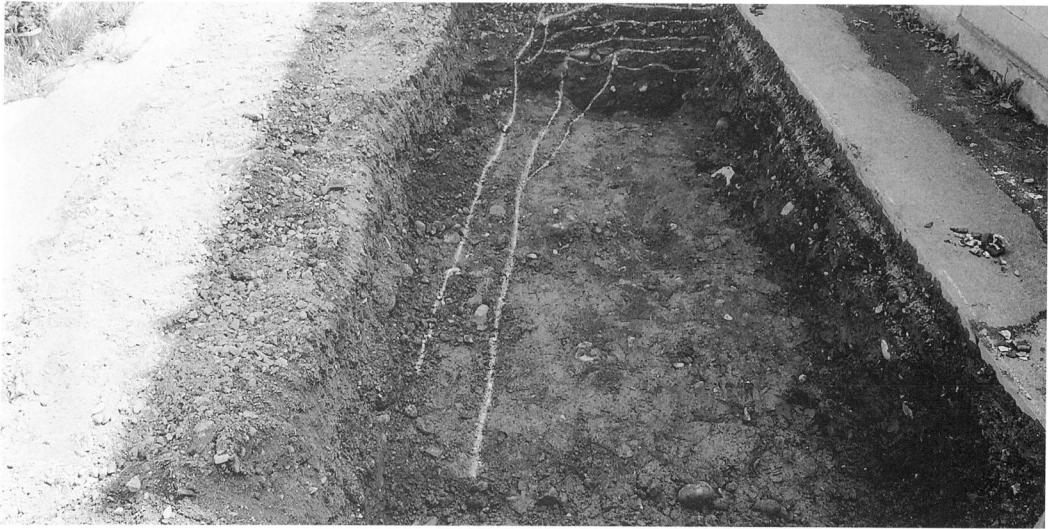
調査第⑥東区 埋め戻し状況（北より）



調査第⑥東区 土層・堀覆土確認状況（東壁）



調査第⑥東区 土層・堀覆土確認状況（西壁）



調査第⑥東区 遺構確認状況（西より）



調査第⑥中央区 土層・堀覆土確認状況（西壁）

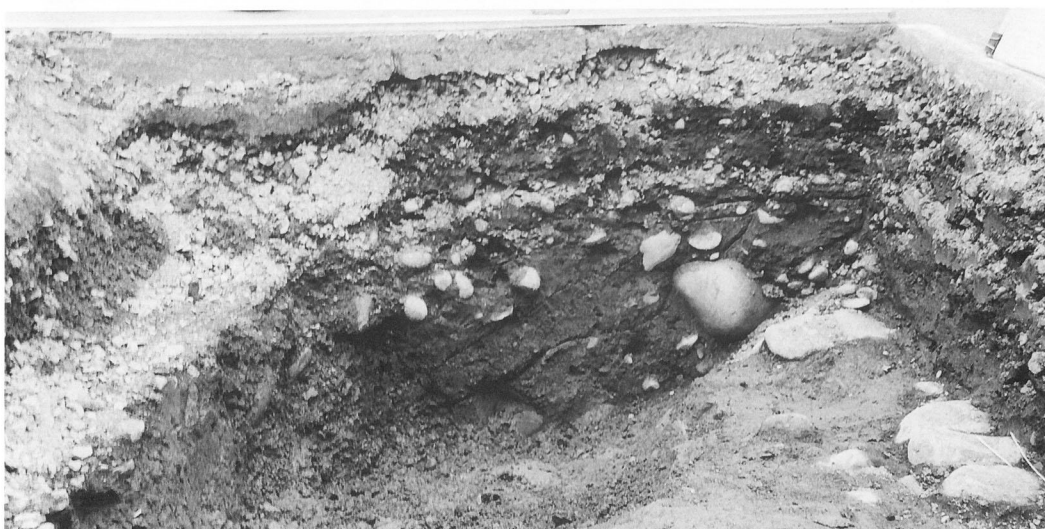


調査第⑥中央区 土層・堀覆土確認状況（西南コーナー）





調査第⑥中央区 土層確認状況（南壁）



調査第⑥中央区 土層・堀覆土確認状況（東壁）



調査第⑥中央区 東側堀検出状況（北より）



調査第⑥中央区 堀検出状況（西より）

調査第⑥中央区 堀検出状況（東より）



調査第⑥中央区 中央南側地山断ち割り状況

調査第⑥中央区 東南部地山断ち割り状況



調査第⑥中央区 埋め戻し状況（北東より）

調査第⑦東区 表土掘削・運搬状況



調査第⑦東区 土層・遺構確認状況（西より）



調査第⑦東区 遺構確認状況（西より）





調査第⑦西区 土層確認状況（東壁）



調査第⑦西区 土層確認状況（南壁）



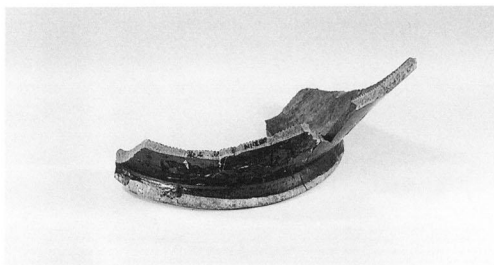
調査第⑦西区 遺構確認状況（北東より）



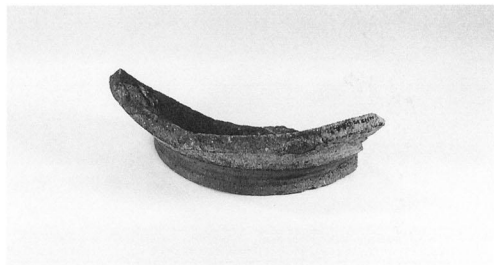
調査第⑦西区 埋め戻し状況 (東より)



火鉢 第①区 1 : 3



すり鉢 第①区 1 : 3



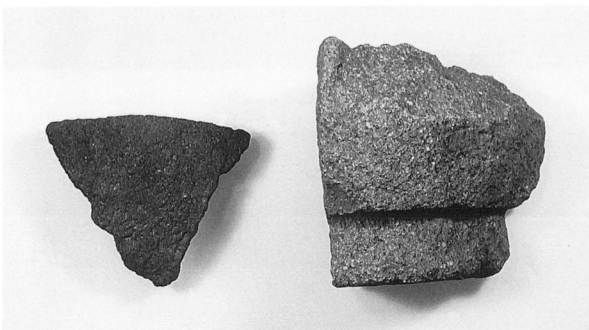
すり鉢 第①区 1 : 3



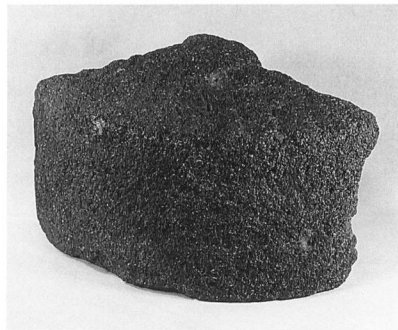
火鉢 第①区 1 : 3



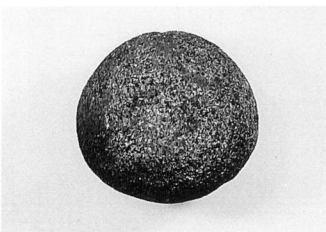
茶臼 第⑦西区 1 : 4



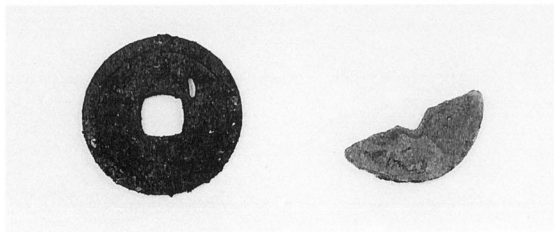
すり鉢 第①区 1 : 4



石臼 第⑦西区 1 : 4



敲き石 第⑥西区 1 : 4



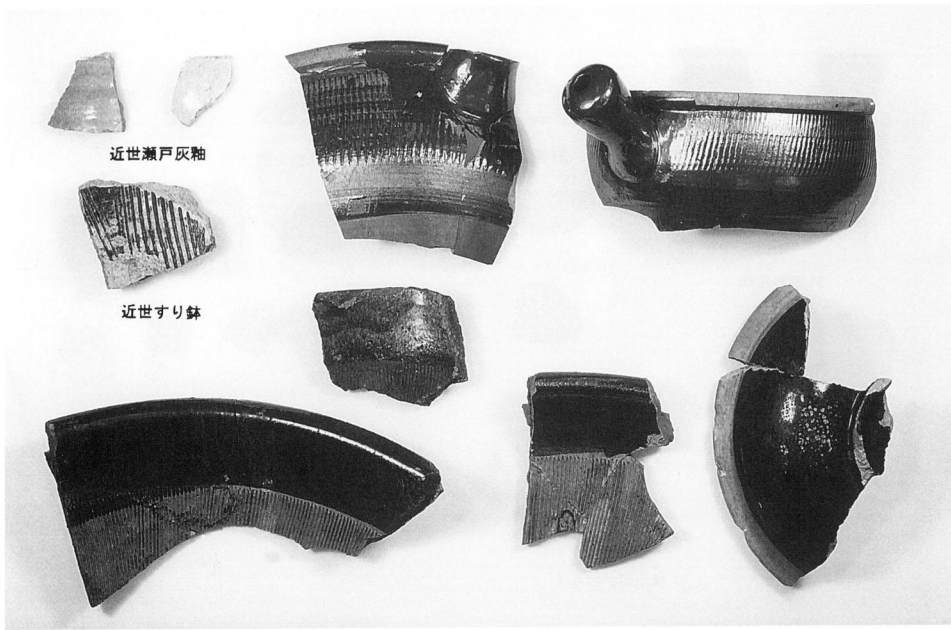
寛永通宝 左第⑥中央区 右第①区P5 1 : 1



調査第①区 出土中世遺物 1 : 3



調査第①区 出土近世・近代以降遺物 1 : 3  
 (明記ないものは近代以降の遺物)



近世瀬戸灰釉

近世すり鉢

調査第①区 近世・近代以降陶器 1 : 3  
(明記ないものは時代不明・近代以降の陶器)

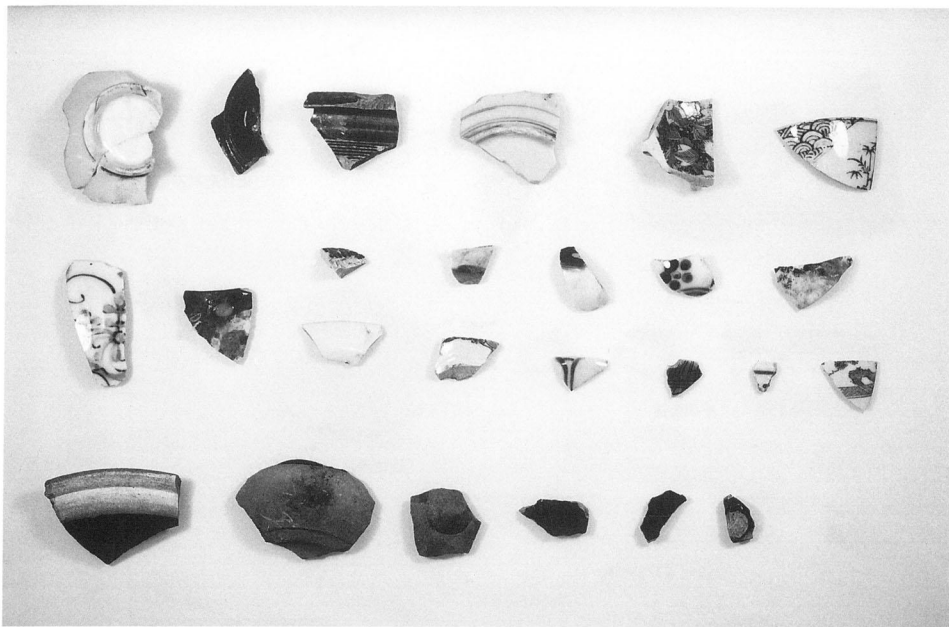


中世土鍋

近世瀬戸灰釉

調査第④区 近世・近代以降出土陶磁器 1 : 3  
(明記ないものは近代以降の陶磁器)

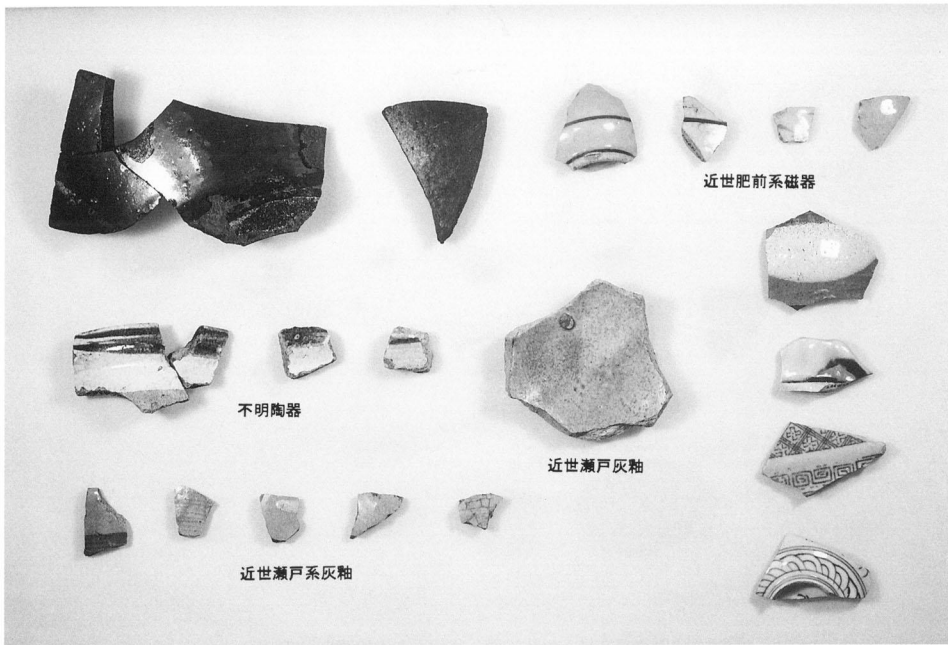




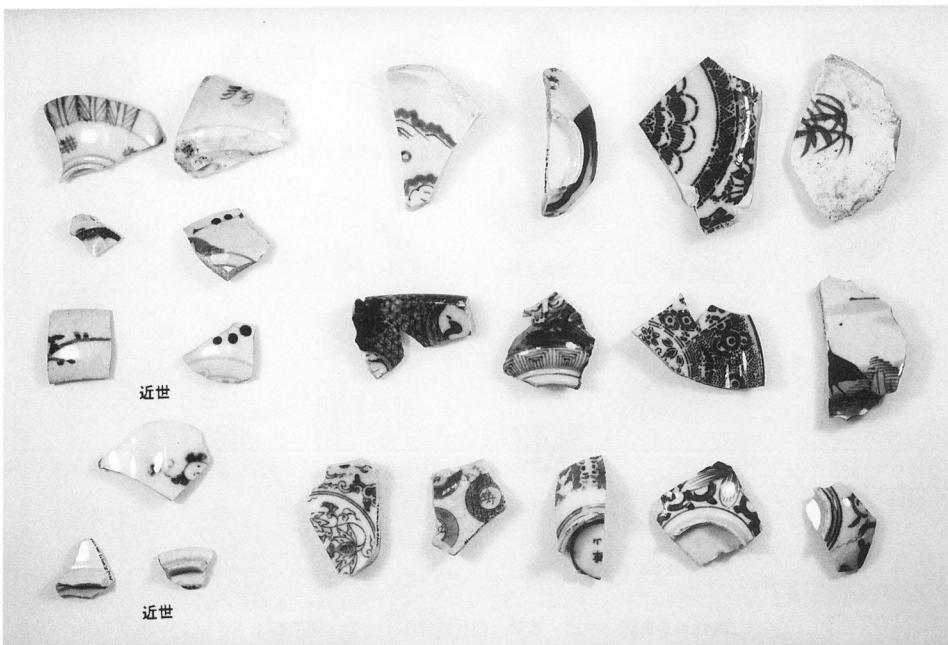
調査第⑤区 近代以降・時代不明陶磁器 1 : 3



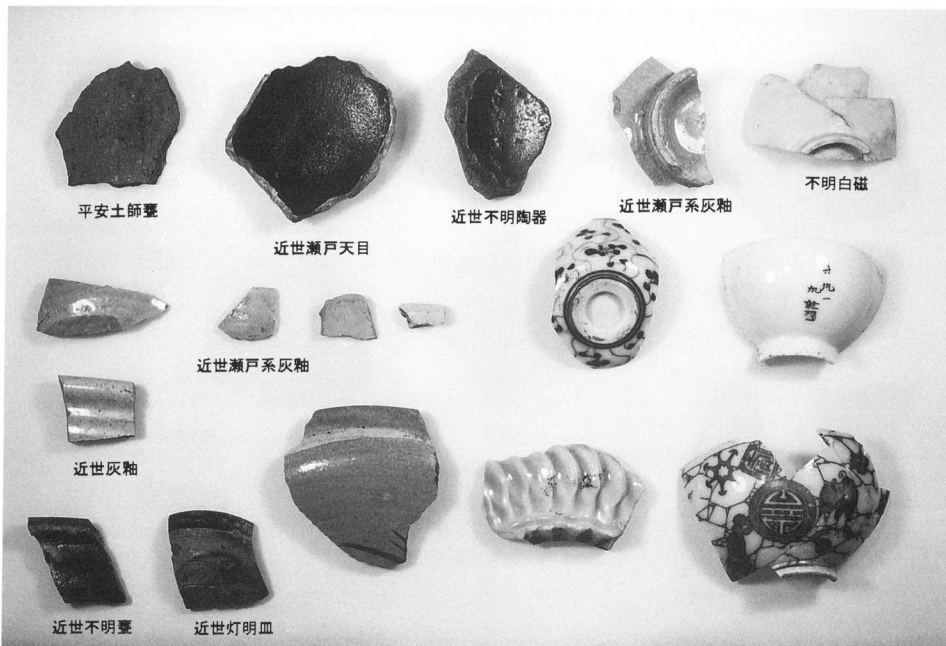
調査第⑥東区 中世・近世・近代以降出土土器・陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の磁器)



調査第⑦東区 近世・近代以降出土陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の陶磁器)



調査第⑦西区 近世・近代以降出土陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の磁器)



調査第⑦西区 平安時代・近世・近代以降出土土器・陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の陶磁器)



調査第⑥中央区 中世・近世・近代以降出土土器・陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の磁器)

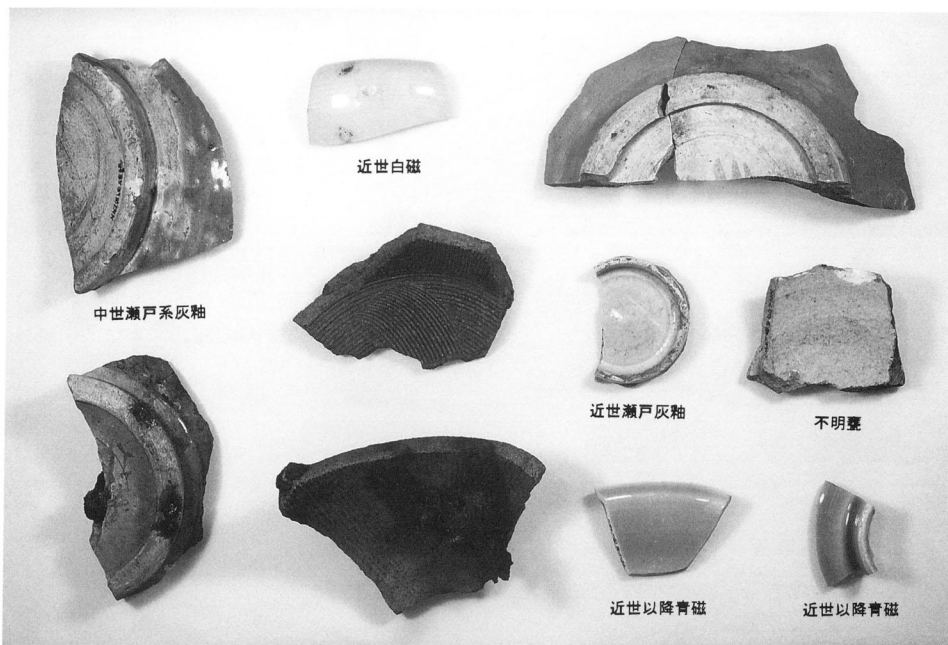


調査第⑥西区 弥生・平安・中世出土土器・陶器 1 : 3



調査第⑥西区 中世・近世出土土器・陶磁器 1 : 3





調査第⑥西区 中世・近世・近代以降出土陶磁器 1 : 3  
 (明記のないものは近代以降の陶磁器)



調査第⑥西区 近代以降出土磁器 1 : 3



野沢館跡付近航空写真 南方より (2004 野沢館跡Ⅳ報告書より)

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第128集

## 野沢館跡Ⅶ

2005年3月

編集・発行 長野県佐久市教育委員会  
長野県佐久市大字中込3056番地  
文化財課  
長野県佐久市大字志賀5953番地  
電話0267-68-7321  
印刷所 株式会社 中信社

---

## 報告書抄録

書名	<small>の ざわかんせき</small> 野沢館跡Ⅶ
副書名	
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第128集
編著者名	羽毛田卓也
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20050331
作成機関ID	
郵便番号	358-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953番地
遺跡名	<small>の ざわかんせき</small> 野沢館跡
遺跡所在地	<small>ながの けん さく し おおあざの ざわ おおあざはら</small> 長野県佐久市大字野沢、大字原
市町村コード	20217
遺跡番号	425
北緯	36° 13′ 19″ 9596
東経	138° 28′ 25″ 6450
調査期間	20040712-20050228
調査面積	3600m <sup>2</sup>
調査原因	まちづくり総合支援事業（野沢散策路事業）
種別	城館跡
主な時代	中世・近世
遺跡概要	集落-中世+近世-建物址+堀-土器+陶磁器+石製品+古銭
特記事項	